

東大文

SAINSBURY INSTITUTE
for the Study of Japanese Arts and Culture
セインズベリー日本藝術研究所

平成28年度
文学部冬期特別プログラム

2017年2月11日-24日

報告書

Report on 2016 Special Winter Program
at the Faculty of Letters

February 11-24, 2017 in the United Kingdom

THE UNIVERSITY OF TOKYO

1 巻頭挨拶

交流の学びの旅によせて

東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長 佐藤 健二 2

2回目の冬期特別プログラムを終えて

セインズベリー日本藝術研究所 統括役所長 水鳥 真美 3

2 ウィンタープログラムの概要 4

3 プログラム実施内容 5

4 受講者レポート

1. Winter Programme 2017 diary 9

Themes Report 16

Holly Holmes 【Newcastle University】

Gianluca Marzagalli 【University of the Highlands and Islands】

Jose Alexandro Salgado-Espinoza 【University College London】

Abigail Spanner 【University of Kent】

Dessislava Veltcheva 【University of York】

2. 岡崎 咲弥【文学部3年】 22

3. 英 航【文学部3年】 27

4. 三浦 寛子【文学部4年】 30

5. 八田 紘和【教養学部1年】 35

6. 廣川 千瑛【教養学部3年】 38

5 総括

今年のウィンター・プログラム

東京大学大学院人文社会系研究科 副研究科長 佐藤 宏之 42



交流の学びの旅によせて

東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長

佐藤 健二

この交流プログラムの記録に、研究科長・文学部長として小さなあいさつをそえる。

夏期には英国の学生たちを日本にむかえ、プログラムでの交流と学習とが、本郷を含む東京と常呂が位置する北海道とをむすんで行われた。そして冬期には日本の学生たちがイギリスを訪れて、首都ロンドンと古都バース、またイースト・アングリアに学んだ。都市と遺跡と地方と博物館という固有の質を有する多様な場でくりひろげられた交流と、学生たちが熱中した座学と見学の時間を心より言祝ぎたい。そして、次の機会にこのプログラムに参加しようと欲するものたちに、その体験の魅力が届いていけばよいと願う。

「世界は一冊の書物である」といったのは、古代の学者アウグスティヌスだった。この北アフリカ生まれのキリスト教神学者は、つづけて「旅をしない者は、その書物の最初のページしか読んでいない」と忠告している。机に座って書物を読むことの可能性と、戸外の世界を旅することの拡がりとは、ここでみごとに重ねあわせられている。民俗学を新しい歴史学としての開拓した柳田国男にも、読書と旅とを見くらべて、その方法の共鳴を論じた一節がある。曰く、書物をただ気分次第に多く読み散らかしても、たいして役には立たないだろう。しかしほんの短い時間であっても自覚をもち、自分の問いと向かい合う方法をたもてるならば、本を読むだけの体験でも人格の成長にむすびつく。同じように短い一日二日の旅でも、心がけてよく観察し、興味をもって見聞きするひとだけが、得がたい知恵を得るだろう、と。たしかに読書も旅も、学ぼうとする人間の人生を豊かにする。それは自分が知らないことに驚き、想像もしていなかった意外なものに教えられる、出会いと気づきの経験だからだ。

東京大学と常呂町（現北見市）との1955年に遡る協力関係も、アイヌ語の聞き取りに訪れた大学の言語学者と町在住の考古愛好家との、そうした旅の出会いの偶然の交流からはじまり、郷土資料館から常呂実習施設に進化していったものだと聞いている。常呂は隣接する遺跡を史跡公園として整備し、陳列館を含む実習施設もまた地域に開かれた博物館としての活動に力を入れている。

博物館は、いわば挿絵をふんだんに備えたビジュアルな書物である。19世紀の作家ヴィクトル・ユゴーは教会を「石の書物」ととらえたが、博物館はその発展形態で現代的な手法で編集された新しい絵本である。今回の交流の旅の道程は、イギリス各地の史跡と博物館とをふんだんに含んでおり、参加者たちは自らの五感を生き活きと活かし、空間に入り込んで読む、ダイナミックな読書の楽しみを感じたに違いない。

セインズベリー日本藝術研究所の配慮のゆきとどいた連携協力のもとで実現したこの交流プログラムに、今年も熱心な新たな参加者を得て、新たな一ページが加わったことを祝いたい。



2 回目の 冬期特別プログラムを終えて

セインズベリー日本藝術研究所 統括役所長
水鳥 真美

東京大学学部生を英国に迎え、英国及び欧州各国の学生との交流を育みながらロンドン、ノリッチをはじめイングランド各地の文化資源について学ぶ冬期特別プログラムは今年で2回目を迎えた。折しも一行がノリッチに滞在されている時、セインズベリー日本藝術研究所が所属するイーストアングリア大学の日本学センター主催による年一回の盛大なレセプションが開催された。人文学部長、理学部長をはじめ、大学における日本学関係者、さらには、セインズベリー日本藝術研究所と提携関係にある各種文化団体関係者など参加者総勢150名に上る賑やかな場に皆様をお迎えすることができた。日本ではまだ知名度が高くないイングランドの一角ノリッチにおいて、日本との交流を強めたいとの気概がじわじわと高まっていることを感じていただけたのではないだろうか。そして、英国からの参加者が日本内外において最高学府としての不動の地位を維持されている東京大学と我々が緊密な関係を持っていることを名誉に思ったことは間違いない。

レセプションでは東京から来られた学生の皆様とお話する機会があった。就職にも話が及び、美術館の学芸員になりたいとの抱負を持っておられる学生の方が、今回の研修旅行において訪問した英国の地方博物館のあり方から何を学んだかについて熱心に語っておられた。若い方に対し、「しっかりしている」という感想を持つことは、紛れもなくこちらが年をとった証拠に他ならないと認識しつつも、やはり頼もしく感じた。研修旅行から学ばれたことが参加者のキャリアの形成に役立てば、このプログラムを計画、実施している我々にとって、これほど冥利につくことはない。来年以降へのやりがい益々高まっている。

2 ウィンタープログラムの概要

- 実施期間** ● 2017年2月11日(土)～24日(金)
(事前のオンライン講座:2017年1月9日(月)からの5週間で受講)
- 内容** ● 前半:ロンドンおよびイングランド南西部でのプログラム(2月11日～2月16日)
▶ 博物館・美術館等の見学
大英博物館、テートブリテン、ロンドン博物館、ウィルトシャー博物館
▶ 史跡等の見学
ストーンヘンジ、エーヴベリー遺跡、ローマン・バス遺跡、
ウェストミンスター寺院、バッキンガム宮殿
▶ 歴史的都市の見学
ロンドン、バース
後半:ノリッチおよびノーフォーク州各地でのプログラム(2月17日～24日)
▶ 博物館・美術館等の見学
ノリッチ城博物館、セットフォード博物館、セインズベリー視覚芸術センター
▶ 史跡等の見学
ノリッチ大聖堂、ヘイズバラ遺跡、ウエストラントン海岸、ウォーラムキャンプ・
ヒルフォート、ケスター遺跡、セットフォード・フォレストのウォレン遺跡、グラ
イムズ・グレイヴス遺跡、サットン・フー遺跡
▶ 講義・実習
・セインズベリー日本藝術研究所での歴史遺産に関する講義、グループ討論
・セインズベリー日本藝術研究所主催のイベントへの参加
・ノーフォーク州歴史環境事業本部での考古学講義、実習
・セットフォード・フォレスト内の墳墓の測量体験
▶ 歴史的都市の見学
ノリッチ、キングスリン
▶ その他
イーストアングリア大学の訪問
- 担当講師** ● サム・ニクソン(セインズベリー日本藝術研究所 上級研究員)
サイモン・ケイナー(セインズベリー日本藝術研究所 考古・文化遺産学センター長)
- 東京大学参加学生の募集方法等** ● 2016年11月に東京大学文学部の website 等で告知、募集開始
参加申込者に対し書類選考の後、12月に申込者に通知。
- 受講者** ● 東京大学学部前期および後期課程学生5名
セインズベリー日本藝術研究所からの派遣学生5名
- 支援者(プログラムに同行)** ● 國木田 大(人文社会系研究科特任助教)
イローナ バウシュ(人文社会系研究科特任准教授)
川辺 幸一(人文社会系研究科事務部財務・研究支援チーム係長)
小野里 拓(人文社会系研究科事務部財務・研究支援チーム)

事前のオンライン講座

プログラム受講者は全員、セインズベリー日本藝術研究所が準備した事前のオンライン講座を受けた。このオンライン講座は、英国滞在中に学ぶ事柄についての基本知識や用語、また訪問する場所の内容を効率的に学ぶことを目的としており、週ごとに約2時間費やしなが、各人が都合の良い時間にオンラインで受講できる形式をとった。講座は5週間にわたり、すべて英語で行われた。毎週、理解を確認するためのミニテストも行われた。

前半の部

プログラムの前半では、主にロンドンに滞在しながら、同市の歴史文化遺産の多様性の理解に努めた。プログラム初日に受講者は大英博物館に現地集合し、その後数日かけてさまざまな博物館・美術館、史跡などを見て回った。大英博物館では学芸員3名が応接してくれ、普段は目にするのできない貴重な遺物を直接手に取りながら学習した。バスを使って一泊二日でイングランド南西部をめぐる遠足も行った。東京大学からの参加学生は、英国・欧州の学生と食事と宿泊を共にしながら交流を進めた。

● 博物館・美術館での見学実習

考古学や美術史学はモノないしは作品を通して過去を探求する学問であるため、ロンドン滞在中は博物館・美術館にて実物の資料を見て学ぶ機会を多く設定した。大英博物館では収蔵資料に関する講義・実習を行った。学芸員指導のもと、歴史資料（土器、青銅器、陶磁器等）の取扱い方法、展示技術等を、実物の資料に接しながら学んだ。ロンドン博物館では、ロンドンの歴史遺産についての素養を深めた。テートブリテンでは、ターナーの風景絵画や、英国の原風景をテーマにした展示を観覧し、ランドスケープに関しての理解を深めた。また、ディヴァイジーズのウィルトシャー博物館では、ストーンヘンジ等に関連した考古遺物について学んだ。各博物館・美術館における展示方法は多種多様で、受講者は学芸員との議論を通じて、その意図や方針等をその都度確認し、知見を広げることができた。

● 史跡等の見学

歴史を学ぶ上では、博物館・美術館資料だけではなく、実際の地理的背景との結びつきを考慮することが重要になる。そのような認識に基づき、ロンドン滞在中は、イングランド南西部の歴史文化遺産を訪問する機会を積極的に設定した。ウィルトシャー州に所在する世界的に著名なストーンヘンジ、エーヴベリー遺跡を訪問し、新石器時代の文化や生業、ランドスケープ等について学んだ。



大英博物館収蔵の陶磁器を実際に触って間近で眺める参加者たち



ストーンヘンジ前にて

また、これらの史跡では、訪問者へのアプローチ方法や展示物の構成等の違いについても議論を行い、理解を深めた。この他に、サマセット州バースを訪問し、ローマン・バス遺跡等の歴史文化遺産を見学した。ロンドンでは、ウェストミンスター寺院等を訪問し、英国の歴史について理解を深めた。受講者間では毎晩、訪れた博物館・美術館や史跡について議論を交わし、歴史文化遺産の意義を考える機会を持った。

後半の部

プログラムの後半では、拠点をノリッチに移して、ノーフォーク州の歴史文化遺産について学習した。後半初日にはセインズベリー日本藝術研究所を訪問し、水鳥真美統括役所長、サイモン・ケイナー博士より歓迎の言葉を頂いた。その後、州都ノリッチを含めたノーフォーク州の歴史的環境を現地訪問しながら学んだ。セインズベリー日本藝術研究所では歴史遺産に関する講義の受講や研究所主催のイベントに参加した。また受講者たちによるグループ討論も行われ、前半の部で感じた意見等を英語で口頭発表した。発表内容は、博物館の学術的・社会的役割の違いや、文化遺産の歴史的価値や背景、展示・解説方法等、多岐にわたっていた。この他に、セトフォード・フォレストを訪問した際には、発掘前の墳墓遺跡における測量調査を体験した。ノリッチ滞在中も、東京大学からの参加学生は英国・欧州の学生と食事と宿泊を共にしながら親交を深めた。

●博物館・美術館での見学実習

プログラム後半では、ノリッチ近隣の博物館・美術館を積極的に訪問した。ノリッチ城博物館では、ノリッチ城の歴史や、ノーフォーク州の歴史と自然に関して学んだ。セトフォード博物館では、グライムズ・グレイヴス遺跡等の展示を見学した。ノーフォーク州セトフォードを中心とするブレックランドは、長野県長和町と、遺跡を中心とした国際交流を行っており、それらに関連した展示や活動等についても説明を受けた。イーストアングリア大学を訪問した際には、セインズベリー視覚芸術センターを訪問し、世界的に収集されたコレクションを見学した。



城を博物館に転用したノリッチ城博物館

●史跡等の見学

ノリッチ滞在中は、近隣地域の歴史文化遺産等をバスで巡った。訪問した史跡は、ノリッチ大聖堂、ヘイズバラ遺跡、ウエストラントン海岸、ウォーラムキャンプ・ヒルフォート、ケスター遺跡、セトフォード・フォレストのウォレン遺跡、グライムズ・グレイヴス遺跡、サットン・フー遺跡等である。グライムズ・グレイヴス遺跡では、学芸員の案内のもと、新石器時代のフリント採掘坑を見学し、当時の人々の暮らしぶりに思いを馳せた。また、ヘイズバラ遺跡、サットン・フー遺跡では、発掘を担当された方から直接説明を受けることができ、貴重な機会となった。



サットン・フー遺跡の発掘を担当したカーヴァー教授による説明

● 遺跡の測量体験

セツフォード・フォレスト内に所在する墳墓遺跡の測量を体験し、考古学の調査と研究の方法について学んだ。担当講師の指導のもと、オートレベルや標尺を用いて墳墓の計測を実施した。考古学の調査に初めて参加する学生も多く、歴史遺産を体感する貴重な経験となった。



初めての体験に戸惑いながらも測量を行う参加者たち

● 遺跡調査の講義

遺跡調査は発掘・報告だけではなく、その後の保存や活用も重要になる。ノーフォーク州歴史環境事業本部では、遺跡の調査方法や遺物についての講義とあわせて、遺跡記録の保管状況やデータベース等を見学実習した。また、ケスター遺跡訪問時には、調査員の方にパブリックアーケオロジーに関する説明を受け、日本と英国の遺跡調査の違いについて議論した。本プログラムでは、遺跡見学、測量体験、遺跡調査の講義を通して、調査全体を模擬学習することができた。



ノーフォーク州歴史環境事業本部での遺物の講義

● 歴史遺産に関するイベントへの参加

セインズベリー日本藝術研究所が主催する歴史文化遺産に関するイベントへ参加した。同研究所の友の会向けに催された能面制作実演や、英国の考古学者が集まるレセプション等に出席した。イベントでは、参加者との交流を通して、日本文化が英国でどのように受け入れられているのか実感できた。偶然にも、東京大学の参加学生数名は能楽サークルに所属しており、能や狂言に関して活発な意見交換が行われた。レセプションでは、英国で活躍する考古学者から直接話を聞くことができる貴重な機会となった。この他に、イーストアングリア大学でインタビュー撮影を行う機会があり、滞在中に最も印象に残った歴史文化遺産や体験について、英語で発表する機会があった。



能面師による能面制作実演



Winter Programme 2017 diary

Holly Holmes, Gianluca Marzagalli, Jose Alexandro Salgado-Espinoza,
Abigail Spanner, Dessislava Veltcheva

● First Day — 11th February: The British Museum

We all gathered in the Great Court of the British Museum to meet the programme leader, Dr Sam Nixon, standing to one side to avoid getting swept along with the crowds. The trip started with laughter, as one person arrived a little late after getting lost in London. Introductions were swift and hard to catch over the sound of bustling visitors, so we were later relieved to find everyone's names provided in the information booklet. Our first day together included admiring famous monuments in the museum, hearing about each other's studies, and enjoying the gift shops. We learned a lot during the day and the Parthenon Marbles were one of our favourite monuments. Once the tour was over, we headed to the Imperial Hotel for our first meeting, where tea, coffee and biscuits (and a warm room!) awaited. Dr Sam Nixon provided a great introduction and we also went around the room saying a little about ourselves. While we were a little nervous, it was encouraging to hear about the different places people had come from and their reasons for coming onto the trip. After this, we gathered our bags and headed to our hotels, giving us time to relax and enjoy spending time with our roommates. For dinner, we went to North Sea Fish Restaurant and had our first meal: Fish and Chips. For some students, it was their first time trying "British Cuisine"; a necessary and hilarious start to the trip.

● Second Day — 12th February: Exploration in London

At 8:30am, we met in the hotel lobby to start the day (we soon found out that, every morning after this, at least one person would be late!). Today, we were going on 'The Original Bus Tour of London'. Racing upstairs to admire the cinematic-like view of the city, we started in Leicester Square, passing many beautiful (and 1960s) buildings, and learning about the different types of architecture. Two examples were Neoclassical Style (used on many expensive houses) and Gothic Style (one of our favourites). We saw Buckingham Palace, St Paul's Cathedral, the Globe Theatre, Borough Market, and the Tower of London, as well as enjoying the sites of walking around London. We enjoyed lunch at the Southwark Cathedral Refectory, which displayed such a variety of food that it was very hard to make a choice. Gift shops were also quickly becoming a tradition on the Winter Programme.

After lunch, we made our way to the Thames River Cruise, travelling over the Tower Bridge. Whilst on the bridge, we heard an incredible story of a bus driver who (when the bridge used to open more frequently) flew over the gap as the bridge was opening. When on the boat, most of us stayed in the warmth, relaxing on the soft seats, and enjoying the comfort of the warm boat while pointing out famous monuments to each other. However, a few people ventured outside onto the roof of the boat, bearing the cold wind that swirled through London. Outside, we waved to people on the bridges as we sailed under, smiling at those who waved back and laughing at those who didn't.

When we got off the boat, we saw a statue of Boudicca, and admired the impressive size and architecture of Big Ben and the Houses of Parliament.

To finish, we visited the Tate Britain, where the Japanese students showed us their excitement for the painting Ophelia by Sir John Everett Millais, and told us how important it is in Japan. After this, we headed to the Norfolk Arms, which was a more traditional English pub, and enjoyed a large variety of delicious food (though most of us were too full to eat dessert!). This was also the first time the Japanese students had ever tried ginger beer, and they thoroughly enjoyed it.

Holly Holmes, Gianluca Marzagalli, Jose Alexandro Salgado-Espinoza, Abigail Spanner, Dessislava Veltcheva

●Third Day — 13th February - Behind the scenes at the British Museum

Today we visited the British Museum again, firstly visiting the Japanese Department on the top floor. Professor Nicole Rousmaniere of the British Museum showed us examples of modern art inspired by ancient Japanese artefacts, an example being the porcelain bowl created by Hosono Hitomi. We were also given the opportunity to see and hold artefacts, and learned how specialists identified original and imitation artefacts (and put us to the test!). Each artefact had its own story, which came across very strongly in the Japanese Gallery, and Professor Rousmaniere enthusiastically told us the stories behind some of the displayed treasures.

After this, we made our way to the museum staff cafeteria, where we enjoyed conversations with researchers over lunch and were able to see more 'behind the scenes' aspects of the British Museum. Once finished, we went to the Britain, Europe and Prehistory Department to meet Dr Neil Wilkin of the British Museum and Neil Burridge, a specialist in reproducing Bronze Age artefacts. They showed us recently uncovered artefacts from the Bronze Age, some of which were surprisingly heavy. Neil Burridge's bronzesmith work was amazing and he showed us a recreated bronze sword (which reminded us of the small swords from Lord of the Rings!). He even has a YouTube page.

Later, we were led by Dr Jennifer Wexler (British Museum Digital Department) to a temporary exhibition on digital technology. One 3D print was actually a mistake, but it was so detailed (and showed the inside of the artefact) that it was put on display. When entering the Digital Department of the British Museum, we had to brave the glass doorway leading into the offices. Many of us gulped as we looked down at, what felt like, 100 metres off the ground (though it probably wasn't that high), and shakily stepped through the doors. Dr Wexler showed us many aspects of how the British Museum was using modern technology, particularly with 3D printing. It was amazing to see and hold copies of artefacts and Dr Wexler mentioned that it was sometimes possible to see more details on a 3D print than on the original artefact. The aim of their work was impressive and we were excited to see what the future held for the British Museum.

After our visit to the British Museum, with the free time we had, we visited China Town, where we showed everyone what Bubble Tea was. We even met a guy dressed in a giant Pikachu suit and managed to get a picture with him. We also decided to show the Japanese students a traditional British sweet shop and took them to Hardy's, which had a wide range of old-fashioned sweets and American candies. It was great fun. Afterwards, for dinner, we headed to Chilli Cool for some Chinese food, which was a great evening spent getting to know everyone better and laughing with those of us who had attempted to eat a very spicy dish (we also had a few hilariously clumsy moments, which seemed to be contagious!). It was a great way to end the day.

●Fourth Day — 14th February: Stonehenge on Valentine's Day

Today we went to Stonehenge and the early start was a struggle for some. Packed lunch was eaten on the coach as we travelled and, soon enough, the famous monument came into view. David Tovey (a volunteer guide) was our guide, starting with the history of Stonehenge in the exhibition, which also had some short films showing the development and usage of the site over time.

Walking outside, we explored the recreated huts (that people might have lived in thousands of years ago) and then marched up to the monument, walking along the Stonehenge Cursus. A few of us enjoyed the fact that sheep dotted the countryside and were only too delighted to find sheep next to Stonehenge. The monument itself was breathtaking, though we were slightly disappointed with the strict rules set in place, stopping us from touching the rocks. Aside from this, though, we thoroughly enjoyed taking pictures and selfies with Stonehenge (if timed right, you could get pictures with no other tourists), as well as admiring the sheep from a distance.

We then travelled to Avebury, which, in our opinion, was far more enjoyable than Stonehenge because of how free the site was. We were able to touch the rocks, take pictures next to them and enjoy running down the surrounding ditches with complete freedom, something that didn't quite exist at Stonehenge. While the site had

been damaged in the past and had a village in the centre, we were fully able to enjoy the mysteries of the rocks and appreciate being so close to them.

While we were on a hill overlooking Avebury, we saw Silbury Hill in the distance (with someone standing on top of it, even though it's not open to the public!). When we got on the coach again and made our way to the hill, we noticed that there was a broken "No Entry" sign. The hill itself is a mystery, but we thought it was a shame that it wasn't appreciated by the public; it was still a very impressive monument.

After this, we drove to Devizes to check in at the hotel, and then we went to the Wiltshire Museum for an after-hours tour. David Dawson, the museum director, showed us around the museum and gave us a chance to dress up and enjoy sitting in the recreated hut that might have been used at Stonehenge. We were even shown some of the archives of the museum. Once again, we finished the tour with the gift shop and ended the day at Pizza Express (which was full of couples on Valentine's Day!).

● Fifth Day — 15th February: Bath

After a refreshing night's sleep (the rooms were very comfortable), we packed our bags and headed to Bath. As expected of British weather, rain began to plummet over the beautiful city, but it did not ruin our enjoyment of the day. The Roman Baths were one of the most beautiful and amazing monuments we visited on the programme.

The audio tour guides were very useful as it allowed us to move at our own pace through the museum. There was also some reenactment going on next to the baths on the bottom floor but we thought they took their roles a little too seriously (when we asked serious questions, one woman



ローマン・バス遺跡で当時の衣装と手仕事の再現

simply replied with "My lady took a bath this morning"). At the end of the tour, we were able to try some natural water from the springs (though it didn't taste very nice). After this, we went to the gift shop and then, as the rain began to get heavy, we went outside to decide the plan for lunch. Today was Gianluca's birthday, so we students were given the chance to have lunch together by ourselves. After searching for a good deal, we found Absurd Bird, an American diner restaurant. It was a great time to have fun and celebrate Gianluca's birthday; a few of us ran up to the 1st floor and took pictures of everyone from the mezzanine.

Later on, we went to meet up with the programme leaders and our tour guide, Rodger Fowler (of Bath Parade Guides). He showed us Bath Abbey, many Georgian style buildings, Thermae Bath Spa (modern 'Roman Baths'), the areas affected by WW2, and even the Jane Austen Centre. Luckily, the sun had come out as we walked around Bath, so we were fully able to appreciate the beautiful city (without getting too wet!). Once the tour was over, we got back onto the coach and headed back to London. When we returned, us students could go into London and find somewhere to eat and, luckily, one of us knew London very well. We went for dinner at a Mexican restaurant called El Camión where we had burritos and continued the celebration of Gianluca's birthday. Seeing the nightlife of London was exciting and colourful, full of partying people.

● Sixth Day — 16th February: Westminster Abbey and Museum of London

When we arrived at Westminster Abbey, we were blown away by how huge the structure was and immediately took some pictures. However, when we saw a sign saying "No Photography", we sighed in disappointment...And took pictures of the sign. Once inside, we were surprised by how tourism-orientated the abbey was, the aspect of religion being somewhat in the background. It even had a gift shop. While the structure was very impressive and it was amazing to see how many famous people had been buried there (we saw the grave of Charles Darwin!), we

appreciated the smaller abbeys and churches far more because they were less focused on tourism. Next, we walked to Covent Garden. On the way over, we saw the changing of the guards at Buckingham Palace; the horses were quite intimidating, so we didn't get too close. We also saw Downing Street, where the Prime Minister lives. Arriving at Covent Garden, we picked up some lunch from 'Wasabi Bento'. Interestingly, the Japanese students commented that the food was sweeter than it was supposed to be; though it was still tasty. While we were eating lunch, there was a street performer, who was a comedian and a magician. We all found him very funny and enjoyed cheering for him. After lunch, we were given free time to enjoy Covent Garden. It was full of markets; a very exciting and colourful atmosphere. There was another street performer who was an opera singer; her voice was beautiful. A few of us wandered around the shops and found a very expensive tea shop, in which we tried many samples of tea (it was very nice tea) but couldn't afford any. When it was time to meet the programme leaders again, we were all ready to go to the Museum of London. We were welcomed by Roy Stephenson (Head of Archaeological Collections), who showed us around the busy museum. The organisation was very different from the other museums we had visited and we learned that the museum was going to be changing a lot as they had been given a new building to use. One of our favourite parts of the museum was the section on World War II, which had a documentary about the daily life of those affected by the war. After visiting the gift shop, we left the museum to go back to our hotel and the day ended with dinner at the Lady Ottoline pub, where we enjoyed great food and great company.

● Seventh Day — 17th February: Norwich

The day was mostly taken up by the long journey to Norwich. However, we made fun use of the time by talking about our favourite music (even singing a little), telling jokes, and looking out for sheep in the surrounding countryside. Lunch was packed and eaten on the coach, but we also shared other snacks that we'd all brought from around the world.

Once we arrived, we had a lot of free time to organise ourselves, relax, and go exploring in the town (and also find a laundrette). We found Norwich very pleasant and the scenery was beautiful and calming. At 3:45pm, we gathered in the hotel lobby and made our way to the Sainsbury Institute (SISJAC). We were welcomed with an official orientation talk at the Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, with Dr Simon Kaner (Head of the Centre for Archaeology and Heritage) and Mami Mizutori (Executive Director). We then had a tour of Norwich Cathedral, next to the institute. Norwich Cathedral had a very different atmosphere compared to Westminster Abbey, as it seemed more traditional and less touristy, and as we walked around, an evening service was going on. We even found a giant baptism bowl that was originally used in a chocolate factory.

In the evening, we made our way back to SISJAC to see a Japanese cultural event on Noh masks. It was very entertaining and interesting, as mask maker Hideta Kitazawa demonstrated his skills while Jannette Cheong, a Noh playwright, explained the history and significance of Noh theatre. As Kitazawa began chipping away at his wooden block, wood chips went flying in all directions. Some of them even landed on us, causing an eruption of laughter around the room. Once the talk was over, we enjoyed chatting with locals before heading to dinner at Toreros, a Spanish Tapas restaurant. The evening meal was by far one of the best we had, as we enjoyed being able to share food and experience everything with a bigger sense of togetherness.

● Eighth day — 18th February: Tour of Norwich

In the morning, we walked to SISJAC to have a talk on Norwich Heritage by Michael Loveday and Brian Ayers, two of the foremost local experts on the city of Norwich. The talk covered the preservation and history of Norwich – right back to the prehistoric settlements. At midday, we headed to the King of Hearts cafe, where we enjoyed a light lunch before beginning the tour of Norwich. We began by visiting buildings that had original medieval and Tudor aspects still embedded in the design. We hunted about for various buildings with these

elements within them, making the tour even more exciting. One of the churches we visited had people setting up a beer festival within it, but the organisers were kind enough to let us into the basement to see the medieval undercrofts. We found out that Norwich has the highest amount of medieval churches in the country. One structure in particular had been “protected” in the 1960s and, of course, we were reminded of how awful 1960s architecture was, as it completely covered the historical brickwork underneath it.

As we came to the end of the tour, we entered the Royal Arcade, which was a very beautiful structure from the Victorian period, leading us to the bustling marketplace (and past the Colman’s Mustard Museum). From 3pm, we were given free time, which involved half of us going to the launderette and the other half shopping in the city centre. Time well spent. For dinner, we went to The Ironhouse restaurant, which was a slanted building, making the room look very strange.

●Ninth Day — 19th February: Happisburgh, West Runton, Warham Camp, and King’s Lynn

The first part of the day was spent visiting Happisburgh (the oldest archaeological site in northern Europe) with Dr Andrew Hutcheson (Norfolk County Council Historic Environment Service) and Dr David Waterhouse (Norwich Castle Museum), who explained to us the difficulties in preserving the site but also protecting the town from coastal erosion. We also visited the West Runton Mammoth site (where a complete fossilized mammoth was found), which was full of sedimentary rock and flint (we picked some up as souvenirs). For lunch, we drove to the Crown Hotel in Wells-Next-the-Sea, which was a surprisingly long journey, so we began to whistle some famous songs that everyone knew, like *The Sound of Music*, *Tonari No Totoro*, and a few others (though not everyone appreciated our musical talent). The roast dinner for lunch was, in our opinion, a better and more delicious example of “British Cuisine”. After this, we got back on the coach and drove to Warham Camp Iron Age Hillfort. On the way we began singing songs such as Kyu Sakamoto’s *Sukiyaki* (*Ue o Muite Arukou*) and Radwimps’ *Zen Zen Zense*, which most of us knew and loved.

The Iron Age Hillfort was one of our favourite sites, as we were able to climb over the hills, feel the strong wind blow us about, and see for miles around – and there were sheep. The site was very impressive, but not many people seemed to know about it (though we needed permission to enter since the site was on private land).

Next, we travelled to King’s Lynn, which had a lot of historical significance, but has not been preserved very well, leading to its lack of tourism and importance as a heritage site (though it was still a pleasant town). While there were many impressive buildings in King’s Lynn, there were some modern touches (like projections of colourful shapes) which was not executed very effectively. However, one church that we went into had a man playing a giant organ, which was amazing to listen to, as the sound echoed melodiously through the large stone building. After the tour, we breathed a sigh of relief as we entered the warm restaurant to settle down for dinner, since the weather had turned bitterly cold. We went to Marriott’s Warehouse, where we had Fish and Chips: two signature British meals in one day.

●Tenth Day — 20th February: Norwich Castle Museum and Caistor Roman Town

Today we visited Norwich Castle Museum. We were given a tour of the castle and were told about the plans for the future of the castle; they were hoping to completely rebuild the inside and make it look more like its original structure. The museum was very interesting. However, we were surprised by the Natural History exhibit, especially since prehistoric artefacts were placed in that area, and by the Ancient Egyptian exhibit, which confused us since the entire castle/museum was centred around British history.

Lunch was at the museum cafeteria, after which we left to get some taxis to Caistor Roman Town – though not without quickly popping to the gift shop. We met with Caroline Davison (Director of Norfolk Archaeological Trust, NAT) who showed us how to use the Augmented Reality app for seeing the 3D recreated version of the Roman town, and took us round the site to find the other app item collection points, while explaining the history

Holly Holmes, Gianluca Marzagalli, Jose Alexandro Salgado-Espinoza, Abigail Spanner, Dessislava Veltcheva

of the site and how NAT managed to create the AR app.

We then went to Caistor Hall Hotel where Mike Pinner (head of the Heritage Lottery Funded Caistor Roman Project) gave a presentation about the community archaeology in the area (and so we could enjoy some pleasant and much needed afternoon tea, a very exciting experience for many students who had never had it), and how professionals and volunteers work together to uncover the rich history of the area. We also learned about the serious issue of 'Night-hawkers' (people who loot archaeological sites at night), with Mike Pinner sharing some alarming stories which happened to him and other archaeologists he knew. Once the presentation was over, we drove back to the hotel and later walked to the Belgian Monk restaurant in the evening. There, we were served huge bowls of mussels.

● Eleventh Day — 21st February: Thetford Forest

In the morning, we went to Gressenhall, where the Norfolk Historic Environment Service (NHES) was based. As we enjoyed tea and biscuits, staff members Andrew Hutcheson, Heather Hamilton, Julie Shoemark and Garry Crace gave presentations on the Historic Environment Service, the Historic Environment Record, and the Portable Antiquities Scheme. We were also shown how a metal detector works and we were allowed to examine some artefacts that were a mixture of unidentifiable and unimportant finds, which was very exciting for us as we were able to create our own interpretations, even though no one knew what the finds were.

We then travelled to High Lodge Visitor Centre in Thetford, where we had lunch at the cafeteria and were then given a talk by Rachel Riley (Forestry Service), David Robertson (Norfolk Historic Environment Service) and Anne Mason (Friends of Thetford Forest) on the historical significance of Thetford Forest and how it is preserved. When we made our way to some of the warren banks that Anne Mason described, we were surprised to learn that the forest was mostly made up of plantation trees, planted after and during World War I and II, to replace the loss of timber that occurred during the wars.

After this, we visited some newly discovered burial mounds, where Claire Bradshaw (Norfolk Historic Environment Service) instructed us on how to take part in a dumpy level survey. It was both a great practical learning experience but also a fun teamwork activity, as we had to work together to plot the changes in height of the mound; looking through the lense of the dumpy level was also very funny because it enlarged people's faces. For many of us, it was a first time experience and we had an awesome time. Dinner was at Lynford Hall, which seemed to be a very posh building with large paintings of famous politicians in the dining room (though we were mostly preoccupied with conversations and food).

● Twelfth Day — 22nd February: Thetford Ancient House Museum and Grime's Graves

The morning started with a visit to Thetford Ancient House Museum, which was rich with information and very impressive for such a small museum. The documentary about the museum's history was a highlight of the visit, as were the collections of prehistoric artefacts. After, we headed to the Neolithic flint mines of Grime's Graves.

This was undoubtedly a highlight of the programme. In some ways, we were 'guinea pigs' for the staff at Grime's Graves, as they had new equipment that had never been worn before. While our suits were being organised, we watched a few documentaries in the small museum (and explored the gift shop) and, as we suited up, we were shown recreated versions of prehistoric tools, one of them being a very heavy flint axe. As we walked over to the open flint mine, our guide gave us a brief history of Grime's Graves. We were shocked by just how many flint mine shafts there were all in one area. Arriving at the mine, we all took turns to go down the ladder, which, for those of us who weren't keen on heights, was a nerve wracking experience. Only once we were inside, we were fully able to appreciate the impressive structure. We were even allowed to climb through the tunnels carved out in the rocks (though not everyone had the guts to do it). We found a hibernating bat and some deer antlers. The site was one of our favourites and it was a very exciting experience to be able to explore the ancient flint mines.

In the evening, we went to the reception at the Sainsbury Centre for Visual Arts at the University of East Anglia (UEA), organized by the Sainsbury Institute to promote their recent archaeology projects, including their new Global Perspectives on British Archaeology project. The reception was also to welcome us, the Winter Programme students. During the event we were interviewed on our thoughts of the programme and met many different researchers from UEA, as well as visiting researchers from the University of Tokyo. The presentation on Neolithic research in Japan using 3D modelling that the Sainsbury Institute are collaborating on was very interesting and inspiring, as everyone had come together to celebrate such an amazing research project. For dinner, we were joined by many researchers at the Ali Tandoori restaurant, where some of the Japanese students tried Indian chilis for the first time (leading us to order two more jugs of water and some yoghurt). The rest of us were not so brave, though it was a very entertaining end to the day.

●Thirteenth Day — 23rd February: Sutton Hoo and Norwich Ghost Tour

We welcomed the morning with bittersweet excitement: a visit to the Anglo-Saxon burial mound complex of Sutton Hoo was scheduled for the day, but it was also the last day. However, it was also Hiroko's birthday. At midnight, we celebrated and, when we arrived at Sutton Hoo, the weather was on our side. We were guided by Professor Martin Carver (University of York), the previous excavator of the site, who took us to the site, explaining the history and tales behind it. We were thrilled to find sheep on the site and we entered the field excitedly, taking pictures with child-like enthusiasm; the sheep even charged us at one point.

We had an excellent time, learning about the site and climbing the burial mounds to enjoy the beautiful view, though the wind sometimes caught us off guard, forcing us to hold onto each other for support. It was so windy, that the doors in the cafeteria wouldn't shut. When we later entered the museum, Professor Carver explained more about the plans for the future of the museum, all of which sounded incredible. In the museum, we enjoyed dressing up with helmets and swords, and pretending to duel each other. Before we left, we made a stop by the gift shop and then drove to the Butler Orford Oysterage, where some of us tried oysters for the first time.

After this, we had free time in Norwich, though the weather in the evening was cold and wet, so not many of us went outside to explore the city. For our last meal together, we were joined by the staff members of SISJAC, where we congratulated the success of the programme and were given our certificates for having successfully completed it. However, the 'Man in Black' soon appeared to take us on the final event... The Ghost Tour of Norwich! The night was cold, windy and wet, making the tour even more terrifying, as 'ghosts' jumped out at us from all directions, making us feel incredibly paranoid throughout the tour. Some students thought it would be hilarious to take part in the scaring game, sneaking up behind people and scaring them out of their wits. The event was both terrifying and hilarious, but also a fun and memorable way to interest people in the dark history and rumours that are part of the city. Although the stories were chilling at times, we were all able to laugh about the event afterwards. We were glad to have slept well despite the 'traumatic' experience.

●Fourteenth Day — 24th February: End of Winter Programme

During the programme, we had a great time helping each other learn more about each other's languages and cultures, and the humour, interest and excitement throughout the programme made the trip even better. The Winter Programme was an amazing experience, one that none of us would ever forget.

Themes Report

Holly Holmes, Gianluca Marzagalli, Jose Alexandro Salgado-Espinoza,
Abigail Spanner, Dessislava Veltcheva

With the Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Culture, we participated in a two-week programme around England, visiting various archaeological and heritage sites, and considering different aspects related to their management. In this report, we will be covering: the effects of tourism – its pros and cons – on heritage, what is focused on and what is neglected in museums, and the accessibility of heritage sites for all people.

● The effects of tourism on heritage

Tourism affects heritage sites in different ways, both with the protection of them and the spread of historical understanding. Much of the financial aid for heritage sites comes from tourism, and site information centres/ desks often have donation boxes when the site entrance is free (e.g. Sutton Hoo, Tate Britain, British Museum). This is a great advantage for heritage management, as the support from visitors often contributes to the protection of the sites. The increasing tourism to various areas also encourages the site managers to improve the accessibility and research of the sites, as the more funding there is provided by the public, the more research the site managers can afford to do. From this, the cultural heritage can expand and people will be able to understand how the past has shaped the world that we live in.

Unfortunately, not all effects of tourism are beneficial. While the funds created by tourism help protect heritage sites, much of the frequent traffic of people causes many sites to become damaged. When heritage sites become more popular, the increase of tourism encourages commercialisation, which includes cafes, gift shops, activity centres, and so on. The continuous building upon heritage sites damages the environment in which the archaeological findings are preserved - particularly with sites that are still buried in the earth - and the eyesores created in such circumstances make protection and research harder for heritage managers.

One example we found concerns many protected buildings in London. Listed buildings in the city were being destroyed faster by the increasing development of the city, and the flock of tourism to the larger monuments over time left smaller 'less important' buildings in disrepair as the impacts of people and pollution from vehicles slowly caused decay. Another example was in Thetford Forest where there was a 'Go Ape!' centre as well as a large cafe and information centre. While it is important to encourage visitors, heritage management should also be aware of what dangers commercialisation can bring upon heritage sites, and Thetford Forest was a very good example of this, as tourists were distracted from its historical value by the other activities on offer causing its historical significance to be lost. We felt that, while there are many protected sites in the UK, it is clear that tourism dictates the protection of particular sites, allowing others to be neglected. This problem causes many areas to lose their historical value and influence.

Many heritage sites that we visited demonstrated the continuous struggle of balancing the encouragement of tourism and the restraining of it. Places such as Stonehenge, Grime's Graves, and Warham Camp Iron Age Hill Fort all showed examples of the negative effects of tourism, and the restrictions set in place today are there as



セトフォード・フォレストのアスレチック“Go Ape!”

a result of the carelessness of previous visitors. An example of this was when we visited Stonehenge. The public access to the site was restricted in 1977, when tourists were causing too much damage to the monument (e.g. taking broken bits of rock, climbing on stones, graffiti). This restriction still stands today and there are many complaints that the site cannot be fully appreciated when it is roped off almost all year round. This conflict between protecting the sites and giving freedom to the public is made worse by the power of the media, and many heritage site managers struggle to find ways to appease the constant barrage of dissatisfied tourists.

Another example was the Warham Camp Iron Age Hill Fort. However, unlike Stonehenge, tourists are able to climb over the hill fort and appreciate the surrounding environment. The heritage site is on private property of a local farmer and his sheep roam in the site. Sites like this are often protected by the landowner and are given support by the local council and/or the local heritage managers. However, many visitors who come to these sites can be careless, and this was especially true with the landowner's livestock. Dog walkers and families with young children have disturbed the livestock in the past, and the same problems have happened on many other heritage sites on private land. We personally saw one example when some dog walkers ignored the signs that said 'Keep dogs on leashes', which could have led to the livestock being disturbed. While many people do not deliberately act in this way, this carelessness can lead to heritage sites being closed to the public, as landowners will no longer want to risk tourists damaging land and livestock. It is therefore understandable that heritage managers struggle to provide both an engaging historical learning experience but also protect heritage sites.

On the other hand, sites like Sutton Hoo were so closed off that there was conflict within the heritage management on how best to approach opening the site up to tourists. Martin Carver, a Professor of archaeology at the University of York, argued that visitors needed to be able to freely see and understand the site, which was not possible with the current path that visitors could take to view the site. While there is the concern that opening the site may encourage 'Nighthawkers' (people who illegally dig sites at night to search for valuables), Carver stated that this would be unlikely to affect the crime rates, as 'Nighthawkers' would break into heritage sites regardless of whether they are open to the public or not. The responsibility that site managers have is very difficult, as it's important to protect and preserve the heritage sites and artefacts, however, allowing visitors to fully appreciate them is also important, causing much conflict among heritage leaders.

Freedom for visitors at heritage sites is very important, as it allows the public to become more engaged with the history around them rather than being closed off from it. However, the balance is hard to find: there will always be carelessness among visitors. During the Winter Programme, our understanding of the difficult position heritage managers are in grew, and we realised that while everyone should be able to engage with history, there will always be boundaries that cannot be crossed for the sake of the protection of the sites.

● What elements of heritage are focused on and what is neglected?

Over the two weeks we had the chance to visit many different museums. For example, the British Museum, the Museum of London, the Roman Baths, Wiltshire Museum, and others. Visiting these museums made us think about what each of them were trying to convey to the public and how they organized their collections. We will be introducing each museum's focus and its layout and then draw comparisons between them. Our conclusion will state which museums we enjoyed the most and believe to have the best way of engaging public interest.

The British Museum seemed to focus more on what the audience wanted. British archaeology took a backseat in comparison to the other impressive artefacts, such as the Rosetta Stone, Parthenon Marbles, Ancient Egyptian exhibitions. The museum leaders considered the size of the building and provided detailed maps for visitors in order to encourage choice. They considered the question 'Are visitors deliberately finding specific galleries or are they wandering through and enjoying whatever they see?'

The British Museum was composed of six floors. Big monuments were on the ground floor due to their size, however, this aided the museum's layout, as tourists were welcomed into the museum with impressive

monuments and it encouraged visitors to explore the museum more because of how much it had to offer. One criticism we had was that the early prehistory sections were neglected exhibits in the museum, having only a few displays before moving onto the Bronze Age. Other museums, such as Wiltshire Museum and Thetford Ancient House Museum, offered more information about prehistory, so we were surprisingly more impressed with the smaller museums in that regard. It was also interesting to see that the top floor had the Japanese gallery, and the bottom floor had the African galleries. According to the museum leaders, when they were choosing where to place each of the galleries, Japan and Africa were two priorities. However, putting Africa in the basement has been viewed as a bit controversial, and there have been a few comments made by tourists, the media, and other heritage managers about the way in which this could be viewed as negatively representing Africa. Apart from these issues, however, the museum's layout was generally very good.

The Museum of London had a better presentation of chronology in British history, however the layout of some artefacts and galleries in the museum were hard to follow. The museum started with the Roman and Medieval period which were presented in more detail than in the British Museum. After this, there were many rooms leading to other exhibits, which allowed tourists to have choice in the museum, and signs pointed to different time periods to help point visitors in the right direction. However, one criticism we had was with the placement of artefacts. Many important artefacts were placed where people couldn't see them, or were placed completely outside of their 'time zone'. This not only confused visitors, but also put important artefacts to waste, as the public were not able to fully appreciate them. There seemed to also be a focus on artistic interpretations of historical periods, one example being the Victorian era, where an exhibition called 'Pleasure Garden' showed traditional Victorian clothing on mannequins, but with modern patterns and influences. While this exhibit was very interesting, the display was misleading, as there were no information plaques inside the room, leading visitors to potentially misunderstand the meaning of the display, and for people who have no knowledge of the Victorian period this can be very confusing. However, the museum did explore different aspects of British history and many of the exhibitions helped make the museum more interactive.

Wiltshire Museum focused on the history of the people in the area, from the Neolithic to the Medieval period. It also included special exhibitions that included paleontology and a new gallery about the gold objects that were found from Bush Barrow (near Stonehenge). There was a larger focus on making information accessible to everyone and the layout was very clear-cut, with the exhibitions in chronological order and one path for visitors to follow round. The prehistory collection was a big focus in the museum and was very impressive, since other museums we had seen did not include such detailed information on prehistory. The collections on display also included important finds associated with Avebury and Stonehenge. However, there was not a large focus on those sites because the museum leaders wanted to encourage tourists to visit them.

There was an art collection relating to the county, some of which were displayed on some of the walls of the museum. There was also a temporary exhibitions area, allowing artefacts to be rotated and shown to the public. We found it also interesting that there were information spots that included more recent history and described different aspects of life in Wiltshire in more modern times, including the founding of the museum. For a small museum, it was remarkably impressive, and the museum's goal to make history all inclusive for all ages came across very strongly.

Thetford Ancient House Museum focused on the story of Thetford and Breckland countryside and was located in a rare house that had survived from the Tudor period. There were a lot of clothes for children to try on, and its interior design brought out the traditional style of the building. There was no strict layout to the display, which (while this did make the order of artefacts hard to follow) allowed visitors to freely choose what they wanted to see, and maps were available to help guide people. Compared with the Wiltshire Museum, this museum seemed to do its best to portray ancient history as well as modern. Overall, the museum was small, but made many copies of their artefacts and displays to allow families to enjoy the interactive learning experiences.

The Roman Baths focused not only on information about the baths, but also the types of people who used them. The museum offered audio guides, with children's audio experiences as well. On the upper floors, as visitors made their way down to the baths, recovered artefacts and information/interactive learning areas were placed in easily accessible places, making the experience more educational. We thought this layout was very good, as it gave visitors context about the baths before reaching the ground floor where you could see them, and the clear path that visitors could follow was also well laid out. The museum also had a spring water fountain so that visitors could taste what the water would have been like for the Romans. Unlike other museums, the Roman Baths presented Roman artefacts in simple and easy-to-understand ways, as well as showing different interpretations of the various artefacts. Despite London being one of the most well preserved Roman cities in the world – in the sense of the archaeological remains below the ground – Bath presented Roman culture far more effectively than in the London museums.

Norwich Castle Museum focused on informing visitors about the history of the castle and the local area, but also about famous historical periods (some displays included Ancient Egyptian artefacts). The basement of the museum was a re-enacted room of what the prisons were like when the castle's use changed. There were many information plaques so that visitors could be easily informed about various topics, and most of the displays were engaging for all ages (we saw school children enjoying the reenactment at the museum). However, one criticism was with the placement of the artefacts. One example was the remains of a flint hand-axe and the West Runton Mammoth which were excavated on the cliffs of West Runton. These artefacts were placed in the Natural History section, and in a corner that could easily be missed by tourists. We felt that highly important artefacts such as these should have had their own Palaeolithic exhibit as this would not only show visitors more history about the area in which they live, but also provide information about a period in history that has largely been neglected by many other museums. Another criticism we had was the inclusion of the Ancient Egyptian exhibit. Since the museum started with history about the castle, and then moved onto British History, the Egyptian exhibit felt very out of place. While it was still interesting, its relevance was not very clear and did not add to the museum's importance. Aside from this, the museum displayed interesting artefacts and the plans for its future seemed very promising.

In conclusion, we found that, while each museum was different from the next, they all had a common focus of making history interesting for all people. While some aspects were neglected, we were impressed with the museum leaders, who were all hopeful for the future ideas that will be brought into the museums. Most of the museums had some exhibitions and displays that were just seasonal which was good to see as it allowed visitors to see different artefacts that may not normally be shown. Many of us agreed that the Roman Baths museum was the most impressive and interesting museum we visited, reasons ranging from how accessible the information was to the many employees that were stationed around the museum to answer any questions. The reenactment events next to the baths were also a fun part of the experience. The Museum of London was impressive too, because of its good chronology and varied exhibits. The British Museum was very impressive with the use of advanced technology. Dr Wexler (from the Digital department) introduced us to their newest technology and how they planned to use it to make learning and research more accessible. These museums impressed us the most and we felt that the way these museums were organised was very effective.

● **Accessibility of history to the public:**

History, given its importance in the understanding of the world in which we live, has been displayed in various ways to the public, examples being tours of cities and use of technology. We noticed other important ways to encourage interest in the historical significance of an area, one example being the use of plaques placed on the walls of historical buildings, providing information about the site. A very famous example were the Blue Plaques in London, providing historical information about various buildings throughout the city (these were also the

first such plaques to be used in the UK). However, the most common and important places to learn about the history of an area (or even an entire nation) are museums (the British Museum was the biggest and most well-known) and various archaeological sites (such as Stonehenge). In these places we found displayed artefacts, which showed the history of a certain region, as well as information plaques and interactive learning areas. Some temporary exhibits were rotated depending on the priorities of the researchers, who try to interest the public as much as possible. We noticed one of the most important focuses in the museums and sites we visited was about engaging families.

We discovered in all the museums we visited, there were spaces reserved for children in order to teach them about history. In some museums, there were also interactive games and even artefact replicas which allowed children, young people, and people with disabilities to feel (roughly) what the artefact is like and to enjoy getting a more hands-on learning experience. The British Museum was a good example of this with their use of 3D printing. The Wiltshire Museum also had engaging activities for children throughout the entirety of the museum, as the museum directors felt that the museum should be 'all inclusive' rather than having a separate room for children. This museum also had a treasure hunt throughout the museum, allowing children to explore the museum collecting stickers for each activity based on an important artefact/historical event displayed there, which we thought was a very effective way of making history more accessible to young people. In addition to this, the Wiltshire Museum had different information boards, some with detailed descriptions, others with quick summaries of information, allowing visitors to learn however much they want about different aspects of the history displayed. Almost all of the museums we visited presented information differently. However, they all made use of the internet and encouraged visitors to find out more information online.

Museums and heritage sites have to also consider people with reduced mobility, hearing or visual impairments, or people with learning difficulties. We were very impressed by the majority of heritage sites we visited, as most of them provided disabled access as well as different ways of presenting information which, many years ago, would have been very uncommon at heritage sites (as well as other places). Our knowledge and ability to use technology to help such people has improved immensely, and we saw new facilities being used all the time to help this audience. For example, many information plaques had braille added to them as well as audio guides for people with vision impairments. Almost all sites had elevator access, which improved mobility access for all people, allowing everyone to have the chance to learn at these heritage sites. One particularly well-organised site was the Roman Baths, which included accessibility information on their website as well, informing visitors before they came about what to be aware of (it also included a printable map of disabled access in the museum, making it easier for visitors to navigate their way round), which we thought was an excellent use of modern technology (making use of developing website software) as well as an important way of showing how involving learning experiences at heritage sites can be.

The use of technology in heritage and archaeological sites has increased a lot in recent years as advancing technologies are constantly being developed and becoming more widespread. Today, most museums use videos, projections, and some even interactive computers/touch screens. However, a problem we noticed is that, in a world that has grown accustomed to the fast paced upgrading of technology, the technology used in heritage often seems dated and slow. During our visits to various sites in England, we were able to observe the uses of technology, its advantages and the shortcomings.

When we visited the British Museum, we noticed that there was not a large amount of technology used within the galleries for the public to see. The digital work done behind the scenes, however, in the Digital Department was quite impressive. We were shown the uses of 3D modelling and printing, and how this could be used to aid research. During this time we also discussed other uses, one example being the idea of using the 3D printed artefacts for children or those with visual impairments, as the museum will not have to worry about how the artefacts are held because they can be reprinted (though the process is expensive). The digital models are also

on the museum website, allowing the public to access more information about artefacts much easier.

In Norwich, one of the best uses of technology was the virtual reconstruction of the Roman town at Caistor. This reconstruction can be accessed by anyone via a free app (any smart device), and simply requires the scanning of the various information boards to load the images, and then with movement of the device to view the 3D model. This was funded by EU money, and is an interpretation of the site based on excavations carried out there. This piece of technology is a good, fun way for visitors to visualise the town without expensive physical reconstructions having to be made. There were issues, however, such as needing to be stood for a while to wait for the information panel to retrieve the images, and the problems (e.g. frozen screen, images that would not load) that occurred whilst we were using the app, as well as some phones not being compatible with the app. Aside from this issue, though, it was a useful and interesting way to use modern technology and, while it did need improvements, the app is a good way to engage visitors in a culture of fast developing technology.

Some museums used other types of technology. One example was in the visitor centre at Stonehenge which used a 360° video room to show the development of the henge, as well as the path of the sun because it was built to align with the summer and winter solstice. A video showing the development of the wider landscape over time was also used at Stonehenge, and was useful for visitors to understand the whole area during the Neolithic period, rather than just the henge on its own. Another example was in the exhibitions at the Roman baths, which used videos of actors dressed as historical people to show how the baths would have been used, and what sort of people might have been working there.

The use of technology has not yet reached its full potential at all sites. The exhibitions at Stonehenge, and the Roman baths, have used technology well, integrating this with written information, the artefacts, and the archaeology of the sites as a whole. However, there are issues to contemplate when thinking about the use of technology and making things more accessible to the public, one example being the use of technology in religious buildings, such as Westminster Abbey where heritage managers must take into account the respect needed in religious buildings where there have also been people buried underneath the building. Overall, while there are conflicts in heritage about how to portray archaeology and history, the use of technology is improving and we were generally very impressed with how heritage managers are taking advantage of the ever-developing technological world.



3Dモデリングとプリンタで再現された彫像



ケスター遺跡の当時の様子を再現するARアプリ。何も無い草原に当時の建造物が浮かび上がる。

● 1日目 — 2月11日 (土)

細かい雪が舞い飛ぶ中、地図を頼りに大英博物館へ。博物館内でりんごをかじっている人達に驚きながら information 近くで集合し、簡単に挨拶を交わした後は Sam Nixon 先生の解説で博物館内を見学した。啓蒙主義の時代に「これは何だろう」という興味から生まれた館の歴史や、世界の博物館であってイギリスの展示にはあまり人が来ないことなど、大英博物館の性格について学んだ。展示されていない所蔵品も申請すれば study room で見せてもらえる制度には、日本とは異なる博物館と市民の関係性が伺われた。続いてエジプトから来たかの有名なロゼッタストーン、大英博物館が誇るミイラコレクション、文化財の帰属問題でしばしば取り上げられるパルテノン神殿のフリーズなどを鑑賞した。フリーズの展示ではレプリカや模型、彩色の再現など様々な展示の工夫がなされていた。多種多様なコレクションを有しているだけあって、どこをどう特集するか、何で展示を構成するかにおいて色々な着眼点・問題点が考えられると思う。イギリスの文化遺産に目を瞞るだけでなく、そうした展示の在り方についても考える2週間にしたい。

Imperial Hotel でのガイダンスでは international students の国際性が豊かなのに驚いた。イギリスだけでなく、イタリアやブルガリア出身の学生もおり、日本の文化に興味を持っている学生もいた。楽しいプログラムになりそうだ。

● 2日目 — 2月12日 (日)

午前中はバスで London 市内を超特急でめぐった。天井のない2階席は非常に寒かったが眺めは素晴らしく、これぞ London! という歴史的な都市景観を見ることができた。花綱の彫刻を施した白い石造りの建物や、それに雰囲気合わせて作られた新しい建物、東京駅の駅舎と似た煉瓦づくりの建物など、街全体の調和が図られているようだった。古い建物の中に新しいブランドや飲食店が入り、中には外観だけが保存されて足場に支えられ、内部が建設されるのを待っている建物もあった。

市内の広場には新旧の素晴らしい彫刻やモニュメントがそびえ、美術館に行くまでもなく美術鑑賞を楽しめる都市だと感じた。テムズ川沿いではショッピングモールとして整備された旧船着き場や復元されたドレーク船、河畔の「Anchor」という店名に、貿易で栄えた歴史がしのばれた。

発電所の再活用に成功したことで有名な Tate Modern を眺めながらミレニアム橋を渡った先にも、一見伝統的な瀟洒な建物が並んでいるように見えたが、ここも昔は工場労働者の下宿が並ぶ暗い街だったそう。17世紀のロンドン大火の前に既に焼け落ちていたグローブ座も白壁がまぶしい程きれいに復元されて並んでいるぐらいで、今まで見てきた街並みも観光客の目には一つの古い景観を保っているように見えても、本当は様々なものが混ざり合っているのだと実感した。その後に乗ったクルーズ船からは、不思議な形をした現代建築の一群とロンドン塔やセントポール大聖堂のような歴史的建造物が対照的に眺められた。私はこれもなかなか面白いと思ったが、学生によっても先生によっても見方は違っていた。

あまりにも短い時間ではあったが、Tate Britain にも行くことができた。John Everett Millais の「オフィーリア」など、数年前来日した作品達に再会でき嬉しい。数年前の特別展のときには特設の台の上に飾られていた作品が、壁の沢山の絵の一枚になっているのを見るのは不思議な思いだった。

● 3日目 — 2月13日 (月)

今日の午前中は Nicole Rousmaniere 先生のご案内で大英博物館日本ギャラリーを見学した。古代から現代まで東京国立博物館を数部屋に凝縮したような展示室には、古器物とそこから発想を得たとされる現代アートが併置されるなど、随所に工夫が見られた。キャプションも日本国内の博物館・美術館よりも、その展示物がどのような時代に位置づけられるのかを重視したものになっていた。日本部門の裏側にも入れて頂いて、アートにみる富士山や煎茶文化の講義、日中欧の陶磁器の歴史の重なり合いについての講義を受けた。時代の違う二つの色鍋島の時代を当てるクイズは全員参加、先生も含めて意見がほぼ二つに割れて面白かった。貴重なコレクションに直に触れる機会を用意して下さったことに大変感謝している。

職員食堂での昼食の後は出土した青銅器や復元された銀色に輝く青銅の剣などを前に、Neil Wilkin 先生が先史時代について解説して下さった。青銅器の首飾りは見た目以上に重い。権力を誇示するのは肩の凝ることのよう

だ。international students は全員考古学の所属だったので、彼らの質問に耳を傾けるのも興味深かった。

午後は Jennifer Wexler 先生が、デジタル技術の活用について紹介して下さった。360 度撮影して合成したデータベースには色々な可能性がありそうだ。原寸大ツールがあれば図版などでは感じられない実物のスケールを再現できるのではないかと想像を膨らました。3D プリントは日本でも銅鏡の復元や文化財のレプリカ展示等に利用されている。日本チームの中には博物館教育をテーマにする人もいたので質問も活発だった。用途が解明されていない遺物の 3D プリントを子供たちに触らせ「何に使うと思う？」と考えさせる利用方法が特に印象的だった。

自由時間には London 在住の学生が案内してくれてイギリスの伝統的な駄菓子屋や日本のアニメグッズを売っている店を覗いたり、チャイナタウンを歩いたりした。学生同士も大いに打ち解けた夕方になった。

●4日目 — 2月14日(火)

朝 7 時半に Stonehenge に向けて出発。Stonehenge の周辺には広大な考古学的地帯が広がっており、Visitor Center に着く前から車窓にいくつもの塚が見えた。Center 付属の博物館では巨石配置の変遷や Woodhenge に暮らした人々の生活について、かなり詳細な解説がなされていたが、Stonehenge がかく有名であってもこの一帯に関する調査は十分には行われていないそうで驚いた。巨石群へは、National Trust などの保護団体の柵を越え、考古の遺跡が眠る平原を歩いて向かった。観光写真には写されないが、大きな道路が近くを走り、地下にバイパスを建設する話もあるそうだ。景観・発掘・交通の両立は難しい。

午後見学した遺跡は Stonehenge とは対照的だった。Avebury は世界最大のストーンサークルだが、静かな町の中にある遺跡で、観光客は少なく、標識はほとんど無く、立地条件も全く異なっていた。人造最大の盛り土 Silbury Hill に至っては人っ子一人いない上、立ち入り禁止の標識が 4 つに割れていた。Stonehenge ではロープの外から遠巻きに眺めるしかなかったが、Avebury では石に触れたり、周囲の土手を駆け下りたりできた。コミュニティのイベントにも活用されているそうだ。こちらの方が新たな発掘調査も行いやすいだろう。今夜の日本チームのミーティングの議題は必然的に、今日訪れた遺跡の比較や観光化の意義と問題点になった。

夕方に特別開館して下さった Wiltshire 博物館は、規模は大きくないが素晴らしい博物館で、見やすい展示や興味深い解説は非常に楽しかった。所蔵品の貸借の問題はきっと世界中どここの博物館・美術館も直面する問題なのだろう。

●5日目 — 2月15日(水)

今日は Roman Baths と Bath の街を見学した。Roman Baths はブリテン島へ侵入してきたローマ人によって作られた大浴場の上に 19 世紀にテラスが継ぎ足され、博物館になっている。本物の発掘現場に通路が渡されて遺跡の真上を歩き回れる構造で、考古学の楽しさを心から味わえた。日本人にとっては源泉の温度が低めなのが残念なところだろうか。見学できる部屋が多く、模型やタッチパネル、プロジェクションマッピング等も使い、amusement museum とも言えるような魅力的な施設だった。遺跡の層・建物と時代の関係が解説されてはいるものの少しわかりづらく、学生同士で展示の在り方について考えるよい参考になった。

街自体もとても美しいところで、ガイドのおじいさんの解説を伺いながら、この地に集った貴族やジェーン＝オースティンら文学者たちに思いを馳せた。

●6日目 — 2月16日(木)

午前中はウェストミンスター寺院へ行った。数え切れないほどの美しい大理石彫刻が並び、とても一日では見終わらないようなところだった。お墓に眠る人々の肖像彫刻も手を合わせ安らかに眠る姿、ローマ軍人の扮装、槍を持った死神から妻をかばうポーズまで様々。エリザベス 1 世やシェイクスピアなど教科書や文学作品でなじみ深い人物にも多く出会うことができ、あっという間に 1 時間半が過ぎた。みごたえのある寺院だがやはりここは特殊だという印象が強い。現役の宗教施設でありながら、スピーカーから流れるミサの案内に耳を傾けている人は少なく、international student 曰く「普通はもう少し避けて歩く」名前の刻まれた墓の床石も、皆気にせず上を歩いてしまう。建物は荘厳・華麗だが雰囲気は寺院というより観光スポットだった。

午後のロンドン博物館も駆け足での見学だったが、ここは時代ごとの街並みを再現しその中に道具などを展示し

ており、子供にも楽しい展示だった。日本でいえば江戸東京博物館と似ているかもしれない。ここには詳しいキャプションがなかったが、学生が質問したところでは、詳しい情報はサイトで確認できるようにし、博物館自体は「体感」することを重視しているようだ。博物館により様々な展示方法があることの良い例だった。

●7日目 — 2月17日（金）

1週間見慣れたロンドンを離れ今日はついに Norwich へ。密集していたビルディングが減り、緑の風景の中に映画「メアリーポピンズ」に出てくるような煙突を備えた戸建てが増えていく。冬枯れの木立でも薄緑色に見えるのは幹に生えた苔のせいで、日本との気候の違いが感じられた。日本では戸建ての家はどれも色や形が異なり個性的だが、ここではあちらの家もこちらの家も同じような赤茶焦げ茶の煉瓦づくりで画一的、空港やロンドンで感じた「日本と似ている」という感覚とは逆だった。

Norwich は Norfolk 地方の中心都市だけあってかなり大きく、フリント（火打石に使われる硬質の岩石）を使って建てられた中世の教会が至る所に見える穏やかな街だ。夕方見学したノリッチ大聖堂はステンドグラスや天井装飾が美しい。London のウェストミンスター寺院とは多くの点で異なっていた。ウェストミンスター寺院が観光スポット的であったのに対し、ノリッチ大聖堂は宗教施設らしい荘厳な雰囲気なたたえており、より祈りの空間であることが感じられた。広い敷地が残り、周囲の環境も保存活用され、古のウェストミンスター寺院もこんなであったろうかとしのばれた。

夕方、セインズベリー日本藝術研究所で友の会向けに催される能面制作実演を私たちも見学させて頂いた。たまたま日本人学生5人のうち3人が能楽サークルに所属するなどして能・狂言に関心を持っており、プログラム初日から皆心待ちにしていた。スペイン料理の夕食の後は学生みんなで、英国一安全といわれる Norwich の街を散策した。運河に映る景色は小樽と似ていた。

●8日目 — 2月18日（土）

おいしい English breakfast の後は、研究所で先史時代から現代に至るまでの街の歴史や都市整備について、Brian Ayers 先生と Michael Loveday 先生の講義を受講し、午後は二先生のご案内で Norwich 歴史散策をした。ビール祭りやレコード市の会場として旧宗教施設が利用され、単なる観光化ではなくコミュニティにとけ込んでいた。Loveday 先生には夕食の席でも色々お話を伺う機会があり、12の歴史的建築物を選定する際の苦労話を伺った学生もいた。Norwich の整備を支えたものは何かたずねた学生は「人々の熱意（passion）だよ！」という答えに感動していた。

夕方の自由時間には見足りない所を見に行く人、買い物に行く人、洗濯に行く人、ホテルに帰ってレポートを書く人、と分かれた。私は市場へゆき、日本ではほとんど見ない野菜・果物の量り売りに挑戦した。八百屋さんと話しながら買ったのは1ポンド分のデーツ。初めて食べる生のデーツが慣れ親しんだ干し柿の味だったことは意外だった。

●9日目 — 2月19日（日）

ヨーロッパ最古の人類の足跡が見つかり、そして今はもうない Happisburgh（読みはヘイズバラ）へ。波による浸食が年に1～2メートルの早さで進行し、町や古い教会もその危機に迫られている遺跡だ。天気も良く素晴らしい景色が広がり、丸く磨かれた美しい小石が砂浜を埋め尽くしていた。何も見られないのではないかと心配しながら向かったが、何も無いどころか何かがみつかる可能性に満ちあふれていた。実際、定期的に探しにくる地元の人もいるようだ。そして、後日講義が予定されているが、イギリスには、その発見を促し活かす制度がある。残念ながら今日の発見で考古学的大発見をした学生はいなかったが、教会の壁に見られたフリント、バイソンの骨の化石のかけらなどを拾った。

午後見学した鉄器時代の要塞遺跡は、円形の丘と溝全体が羊を放牧している私有地の中にある。私有地と学問の公共性が重なり合うところだった。

夕方着いた Kings Lynn の町は観光化途上だそうで、商業都市だった頃の税関の建物や教会の壁に映し出されるプロジェクションマッピングは見る人もなく寂しかった。夕食のレストランの2階には17世紀の町を再現した精

巧なパノラマ模型や歴史を紹介する印刷物があり、人々の町に対する愛情が感じられるのにと残念だった。夕食前に町を歩いたときに教会の中にも入った。黒い法服姿の牧師がオルガンの練習をしていたり、子供用の本棚とおもちゃが置かれていたり、観光化が進めばなくなってしまうであろう素朴な日常が一方にあり、他方には多くの人に知られないままではもったいないような感動的に美しい祭壇彫刻があった。Norwich は歴史的な都市を観光化した成功例、Kings Lynn も Norwich から学べるというのも一つの見方だが、歴史も規模も違う二都市を単純に比較することはできない、というのが、日本チーム今夜のミーティングの意見だった。

●10日目 — 2月20日 (月)

午前中はノリッチ城博物館へ。ノルマン人が建てた城が後に刑務所として利用され、19世紀にヴィクトリア朝様式の手すりや階段を施して博物館にされた。中は広々としていてこれはこれでよいが、現在博物館では刑務所にするため撤去されてしまった内部の壁を作り、ノルマン時代の城に復元する計画が進行中だそう。質問してみても驚いたのは、改築への反対がきわめて少ないことだった。魅力的な計画であるが、改築することは今あるものを壊すまたは覆い隠すことであり、新しく作られるものはノルマン時代の壁にはなり得ない。この計画の背景にはもっと人が多くの入場者を、という狙いがあり、これは当然のことだが、「何を残すべきか」も需要と供給の原理を免れ得ないのだろうか。

ノリッチ城博物館は城や地域に関する展示だけでなく、英国の歴史や自然史も扱っている。教育面も熱心で、「国立総合博物館地方分館」のような役割を担っていると感じた。

午後は Caistor Roman Town 遺跡を見学した。強風がこたえたが、普通の野原にしか見えない遺跡を遺跡として楽しんでもらうため、標識に拡張現実が組み込まれており、大変面白かった。案内してくださったのは Norfolk Archaeological Trust の Caroline Davison さんで、団体では10程の遺跡を管理しているが給料をもらって活動しているのは彼女だけ、後はボランティア、という状況に特に日本チームはショックを受けた。

次に community archaeology の講義を受けた。市民が発掘を行い、参加した若い人が専門の道へ進んだ例も複数あるそうで、international students の中にも参加したことのある人がいた。市民に広く知られるようになると夜間盗掘が増えてしまうというジレンマがあることも知った。

●11日目 — 2月21日 (火)

午前中は記録・管理・教育など史跡・遺跡に関するあらゆる相談に対応する Historic Environment Service や、市民が金属探知機で発見した物や遺跡のデータベースである Historic Environment Records の講義を受けた。日本でこれらに相当する機関は何だろう、というのが日本チームの疑問だった。外の世界を知ることは自分の国を振り返るよいきっかけになった。

午後は人工の林に囲まれて過ごした。High Lodge は中世から近代までうさぎの繁殖場だったが、いまや枝打ちされた木が整然と並んだ林だ。もぐらが掘り返した土の山も至る所にあった。何百年も前にはうさぎが掘り返していたことだろう。

林の向こうの広い空き地では塚の測量を体験した。5年前に発見され、レーダーを使った航空写真で確認された後周囲の林が拓かれて現在の状況になったそう。未発掘の塚を実際に測量するのはとてもワクワクするものだった。ただ、風が強くメジャーを押さえるのも大変だったので、正確に計測できたかは疑わしい。

●12日目 — 2月22日 (水)

Thetford の小さな博物館に行った後は、新石器時代人が掘ったフリント採掘場の遺跡である Grime's Graves を探検した。はじめはごく自然にひらけた凹凸が無数にある野原、に見えたが、整備時の灌木の切り株が残っていたり、木に覆われた塚があったりと、この景観も管理・維持されて存在しているものだった。羊も草刈りに一役買っているそう。遺跡には、ハーネスに命綱にヘルメットという出で立ちで12メートルの梯子をおり、地底の坑道を膝を折って進んだ。床面すれすれの所に、石斧に使われ輸出もされたフリント層が露出していた。先史時代人が使った鹿角の道具の一部が残されているのを見つけた時が、一番興奮した瞬間だった。帰る頃にはみんなチョーク層の粉塵で服が白くなっていて、とても貴重で楽しい経験をした一日になった。一般には公開していない坑道を

岡崎咲弥

特別に開けてくださったことにとっても感謝している。

夕方には East Anglia 大学のギャラリーでこのプログラムに関するインタビュー撮影があった。その後の evening reception は学者の交流の場であり、私共学生は戸惑ってしまったが、いつかこんな風にネットワークを広げられるようになりたいと夢が膨らんだ。積極的に会話に入れる日本人学生もおり、仲間から学ぶことも多かった。

●13日目 — 2月23日 (木)

プログラムのクライマックスは Sutton Hoo へ。美しい七宝象嵌の宝飾品や金製品、ヘルメットが出土した遺跡で、初日の大英博物館でも展示が組まれていた。到着したときは陽射しがまぶしい美しい朝だったが、次第に曇り強風がさらに激しく吹き荒れて、飛ばされそうになりながらの見学になった。アングロサクソンの王を埋葬したとされる巨大な船が出土した塚や、処刑場にされた塚の跡を見学し、遺跡の物語に聞き入った。発掘調査者選定時のエピソードでは、すべてを発掘するのではなく、なぜそこに塚があるのかという物語を知るために最小限の発掘を主張したというお話があり、宝探しではなく学問に従事する誇りを感じた。

Sutton Hoo 遺跡を堪能した後、遅めの昼食をとったが、生牡蠣は全員が堪能、という訳にはいかなかったようだ。私にとってはとても美味しかったが、international students にはなかなか難しい料理だった。そんなことも思い出にしつつ Norwich へ戻り、最後の自由時間を過ごした。パブでの夕食後、修了証を頂き、ゴーストツアーへ。これは詳述を避けるが、仲間をおどかし過ぎ、「君は仕事がほしいのかね?」とゴーストにスカウトされそうになった学生もいた。

●14日目 — 2月24日 (金)

ホテルのロビーで名残を惜しみつつ「somewhere! (Sam-where!)」コールで Sam 先生を中心に集合写真を撮り、研究所が用意してくださったバスで London へ。羊が草をはんでいいるのどかな景色ともお別れ。Tower Bridge など首都 London の都市景観だけでなく、英詩に詠まれたような田園風景もまた、歴史的な景観なのだ。

「霧のロンドン」も今日ばかりは快晴。各々重たくなった荷物を引いて Paddington 駅へ降り立った。ここで地元へ帰る学生、今日の便で日本へ帰る学生、もう一泊して V&A ミュージアムへ足をのぼす学生、と分かれた。

◎結 び◎

2 週間のプログラムを通してイギリスの考古学、博物館・美術館制度や市民と考古学の関わりはもとより、他にも沢山のことを学んだ。丘がどこまでも続く広々とした地形も、地震がない地盤も、民族が大きく移動した歴史も、日本とは大きく異なる点だ。イギリスの多くの施設に足を運んで驚いたのは、日本よりもバリアフリーが進んでいることだ。Grime's Graves には仮設トイレが2つしかなかったが、1つは車いす利用可。他の遺跡でも大きなスペースを取っていた。Stonehenge に行った夜泊まったホテルでは、身体障害者用に通路・浴室に広いスペースを確保した部屋に割り当てられた学生もいた。

International students と日本人学生は共に仲が良く熱心で、素敵なメンバーに恵まれた。日本チームで2日に一度、疲れたと言いながらも行ったミーティングから得たことも多かったと思う。なにしろ確認や意見交換をして気づいたら2時間も経っていた夜もあったのだ。

このプログラムを通して得たことをいつかどこかで活かせるよう、学科の勉強だけでなく、それを取り巻くものについても勉強を続けていきたい。

この充実したプログラムを計画し運営してくださった先生方とセインズベリー日本藝術研究所の方々、ご協力くださった多くの機関の方々に、学生一同心からの感謝の念でいっぱいです。ありがとうございました。

1. はじめに

私は本プログラム4日目に Devizes の Wiltshire Museum で「ARCHIE & OLLIE'S Prehistoric Trail」という子供向けのパンフレットを紹介されたことがきっかけで、博物館の教育に関心を持ちました。そのためプログラム中、博物館ごとに行われている児童用の展示について情報を収集してきました。

さまざまな博物館をまわるなかで、博物館の学問的な側面だけでなく、子供にむけて開かれたさまざまな教育的な側面に気付くことができました。そしてその手法は博物館ごとに特色があるということもわかりました。

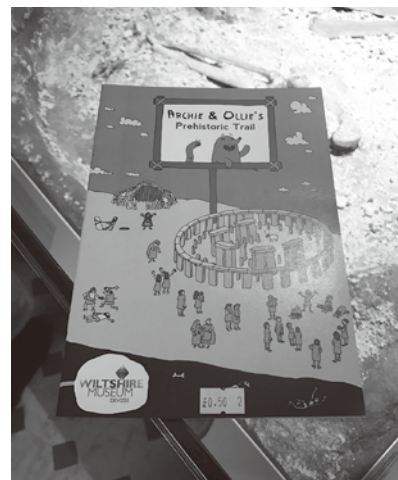
以上を踏まえ、プログラム中に訪れた博物館のうち、特に興味深かったものについて項目を設けてそれぞれのチャイルドコンテンツについて紹介します。

1) Wiltshire Museum (4日目) —計画的なキャラクター展開—

先述の「ARCHIE & OLLIE'S Prehistoric Trail」という冊子があったのが Wiltshire Museum でした。このパンフレットにはミミズの ARCHIE (アーキー) とモグラの OLLIE (オリー) という2匹のキャラクターが登場します。彼らの名前は2つを順につなげると ARCHIE + OLLIEE → ARCHAEOLOGY (考古学) となるような遊び心のもとに名づけられています。読み手は彼らと一緒にスタンプラリー・迷路・間違い探しなどを楽しむことができます。

ARCHIE と OLLIE はパンフレットの中だけでなく、博物館のいたるところで子供用の展示物とともに姿を見せます。例を挙げると、土器の模様が描かれたパズルであるとか、ストーンヘンジに見立てられた積み木であるとか、琥珀やフリント(火打石)などを拡大してみることができる顕微鏡といった具合です。それらの展示物についている説明書きのボードはコピー用紙のような粗雑なものではなくプラスチックで作られており、キャラクターと展示物をリンクさせるべくしっかりと設備費が投じられているということがうかがえました。

Wiltshire Museum と3日目に訪れた大英博物館とを比較して気づいたことがあります。大英博物館では、Wiltshire Museum のように子供向けの設備が館内に点在するということはありませんでした。大英博物館の教育的な取り組みとしては、サムスン社と提携してデジタルデバイスを用いたワークショップを開催していることなどはあとから調べてわかりましたが、博物館全体の雰囲気としては児童教育というよりは学問的な色が強いように感じました。一方で Wiltshire Museum はそこまで広い博物館ではないにもかかわらず、洞窟の模型や土器を模したパズルなど触って体験できる設備を作り、またそうした設備を置くスペースを捻出していることが印象的でした。これらの特色を踏まえ、大英博物館は観光客や専門性の高い人々へのアプローチを主としている一方で、Wiltshire Museum は子供の学習の場を提供する博物館としての自負があるのだろうと感じました。両者の違いが教育コンテンツの違いに表れているといえるでしょう。



*ARCHIE & OLLIE'S Prehistoric Trail

2) Roman Baths (5日目) —音声ガイドを利用したユニークなチャイルドコンテンツ—

5日目に訪問した Roman Baths にあった博物館にも特徴的な教育コンテンツがみられました。まず Wiltshire と同じくキャラクターを製作していたという特徴があります。Roman Baths のキャラクターはローマ風の衣装をまとった7人の人間のキャラクターたちでした。それぞれに名前があり、Gaius (ガイウス・ユリウス・カエサルからだと思われます) などローマに関連したニュアンスの名前が付けられているようだということがわかりました。彼らは「Meet the Romans at the Roman Baths」という子供用のパンフレットに登場し、クイズに答えたりスケッチをさせたりといった形で館内を誘導する役割を果たしていました。

Roman Baths のキャラクター利用の方法で目を引くのは、音声ガイドとリンクしたサービスがあるということです。入口で旧式の携帯電話のような形をした機械を受け取ってそこから流れるオーディオガイドを聞きながら博物館を回ることができる有料サービスがあるのですが、Roman Baths ではそのオーディオガイドにキャラクター版の音声ガイドが収録されています。ガイドの基本的な使い方は、展示の横の看板に記載されている番号を手持ち

の機器に入力してガイドを聞くというものです。通常のガイドは看板数枚に一つくらいの頻度で登場し、通常のガイドの中でも特に重要な展示には隣にキャラクター版の音声ガイドの番号もついているという具合です。子供用に作られているはずですので易しい英語で話してくれるのかと期待して聞いてみましたが、通常の音声ガイド自体もそこまで言い回しが難しいという印象はありませんし、キャラクター版のほうが口語的な解説文になっているため英語としてはむしろ聞き取りづらい印象を受けました。

3) Museum of London (6日目) —電子機器を利用した展示と体験型展示という2つの特徴—

Museum of London はロンドンという地域の歴史に焦点を絞って通時的に展示している博物館でした。この博物館にも興味深い教育用コンテンツがいくつかみられました。まず目を引いたのはパソコンが備え付けてあるコーナーが複数見られたことです。観覧者はパソコンを使って展示についての説明などを読むことができました。さらに、子供用のゲームがインストールされているパソコンもありました。ゲームはいくつか種類があり、私はその中のクイズゲームを遊んでみました。学校の先生役のキャラクターが生徒にクイズを出す形式になっており、4択問題にこたえていくゲームでした。私が遊ぶ前は子供二人が母親と一緒に楽しんでおり、ゲームという子供に受け入れられやすい題材で興味を持ってもらうやり方は効果的だと思いました。

また Museum of London で印象的だったのは、レプリカなどを触って体験する展示 (hands-on) のコーナーがあったことです。この Hands-on のコーナーでは、長机に博物館職員の方が二人ほどついて子供たちの相手をしていました。私が見せてもらったのは、金属でできた「靴脱ぎ具」でした。その器具は金属でできており、クワガタのような形を想像すると分かりやすいです。クワガタの胴体にあたる部分を片方の足で踏み、クワガタの顎にあたる部分に靴のかかとをひっかけて靴を脱ぐのに使います。自分の手を汚さずに靴を脱ぐために作られたと言っていました。他の博物館も申し込み制で親子連れを対象にしたワークショップを開催していたところはありませんでしたが、係員の方が常駐して Hands-on 体験をさせてくれるところはありませんでした。Hands-on コーナーを設計し、さらに係員を2人もつけて運営しているという点に Museum of London の熱心さがうかがえます。

4) Norwich Castle Museum (10日目) —広範な展示物を活かした教育ステーション—

Norwich Castle Museum は、プログラム中に訪れた大きな博物館のひとつでした。Norwich Castle Museum は Wiltshire Museum などと比べると規模が大きく、より多角的な展示を置いている博物館であるというのが私の印象です。まず Norwich Castle Museum の特徴的な点として、小規模な美術館が併設されています。また、動物の化石だけでなく全身模型などが並べて展示されているスペースもあり、考古学・歴史学の博物館というよりは美術や生物学なども含めた総合博物館というかたちで打ち出しているように見えました。規模の大きさは全く異なりますが、日本でいうと国立科学博物館のような裾野の広さを感じました。

そのような概括的な展示物の特徴もあってか、児童への教育には力を入れているようでした。小学生くらいの子供たちが列をなして美術館を見学したり、館内の椅子とテーブルに座って食事をとったりする様子も見られました。教育的な展示の一例としては、短冊形の木の板を並べ替えてローマ人の織物の模様にするというパズルがあり、ローマ時代のコインのレプリカと思いきやその上に紙を載せて色鉛筆を走らせると模様のトレースができるようなさまざまな工夫を凝らしたものもありました。

一方で、その概括性ゆえに問題と感ぜられるところもありました。例えば、Norwich Castle Museum に訪問する前日は Happisburgh という海岸に赴いてそこで出土した石器について学習していました。Norwich Castle Museum にはちょうどその石器のレプリカが展示してあったのですが、それは考古学ではなく地理学のコーナーで紹介されていました。さらに、この石器一つをとっても先史時代の人々の生活を推測したり遺跡の調査について話を広げたりとさまざまなストーリーを提示することができるはずなのに、そこではほんの小さな説明文しかついていませんでした。このように、学問的な視点を通して考えるといささか疑問の残る展示内容もあり、「わかりやすい・なんでもある」というジェネラルな博物館の抱える問題についても考えさせられました。

5) Grime's Graves (12日目) —遺跡と博物館の両立—

プログラム 12 日目には、フリントの採掘穴の遺跡が連なる Grime's Graves とその備え付けの博物館に行きまし

た。この博物館の良かった点は、博物館が整えられていると同時に目の前にある遺跡のインパクトも大きいということでした。Grime's Gravesを訪れる前に遺跡はいくつか訪問しましたが、Caster Roman Town（ローマの街があったとされる遺跡）や Warham Camp（円状の溝が残存する遺跡）は一見ただの草原にしか見えないようなタイプの遺跡であり、また現在は牧草地になっているためその遺跡に関する知識は周辺に建てられた小さなパネルからしか得られませんでした。そのため、博物館によって体系的な知識が得られるうえに、実際に採掘孔に降りて遺跡自体も目に見えるかたちで体験できる Grime's Graves は両者の優れたバランスが実現されていたと思います。



Grime's Gravesビジターセンターの展示

2. おわりに —このプログラムに参加しての感想—

私は今回のプログラムでは英語がてんで聞き取れず、話せず、また考古学についてもほとんど知識がない状態で臨ませていただいたため、「言われた話を理解する」という作業を行うだけでも毎日が死闘でした。しかし、わからないところを日本人の学生メンバーと相談したり、イギリスの学生にわからなかった箇所の解説をお願いしてまたそれを必死になって聞くというかたちで何とかついていくことができました。

私の体感では「イギリス英語」という雑然とした区切りはあまり適当ではなく、一人一人が全く毛色の違う英語を話していたということが印象に残っています。国というのはそこまで存在感のあるものではなく、結局は人間同士のコミュニケーションの要素の一つに落ち着くのではないかなというのが現在の所感です。

2週間といえども最後まで気持ちを保って乗り切るのはかなり大変だったので、プログラム後半は正直もう帰りたいという気持ちが首をもたげたこともありました。しかし、全行程が終わった日の夜、ホテルにたどり着いたときはとてつもない寂しさがなだれ込んできたのをはっきり覚えています。居心地の良い空間と優しさのあふれる人たちに囲まれていたということに改めて気が付きました。

悪戦苦闘しながらもこのプログラムを乗り切ったという体験は、今後振り返って自分の自信を形成していってくれと信じています。また、大学で過ごす中で積み重なっていたプレッシャーや人間関係から一時的に抜け出して、まっさらな人間関係にとびこむことができた時間は自分の内面を見つめなおす素晴らしい機会にもなりました。

あらためて、優しく接してくれた学生と教員の皆様、ならびに貴重な経験をさせてくださったセインズベリー日本芸術研究所、並びに東京大学文学部に感謝の意を表します。



Grime's Gravesにて。説明がなければ地上の起伏にしか見えないが、地下には当時のままの採掘跡が残る。

1. はじめに

本プログラムでは前半はロンドン、後半はノリッチを中心に、イギリスの文化施設や遺跡を訪れ、考古学を軸として文化政策や文化教育への市民参加の在り方などを学んだ。

イギリスや日本に共通して、古い建造物をどう守り、街の発展に溶け込ませていくかという問題がある。イギリスでは建造物保存のために、指定された建造物の改修や改築には許可を必要とする Listed Building という枠組みがある。Listed Building に記載された建築は、重要度に従い Grade I、Grade II*、Grade II に分類され、全体では約 500000 件が登録されている。景観保全には、地方公共団体による保存地区指定などがある。日本では、国宝・重要文化財の指定や、伝統的建造物群保存地区などがこれにあたるだろう。しかし、双方とも、保護されるべき建造物が十分守られているといえない状況であり、特に都市化が進む地域は変化が著しいため、破壊されて失われやすい傾向にある。

プログラム中、ロンドン、バース、ノリッチ、キングス・リンでは、街をめぐり、景観について考える機会を得た。なかでも建造物保存に対する都市間の意識の差異や、その景観への表れ方は印象的であった。本稿では、上記の 4 都市の事例を紹介しながら、イギリスの都市景観と建造物保存の状況を概観したうえで、それにまつわる市民意識の問題や、保存と観光の問題について考察を行う。

事例を紹介する前に、訪れた 4 都市について簡単に説明を加えておく。ロンドンは言うまでもなくイギリスの首都であり、18 世紀以降のものを中心に多様な時代の建造物が見られる。バースは、ロンドンやストーンヘンジと並び、イギリスを代表する観光地の一つである。観光の目玉となっているのは、ローマ期の遺構が残るローマ・バスと呼ばれる施設と、18 世紀以降貴族の保養地となり建設されたジョージアン様式や 16 世紀頃のイタリヤを中心に流行したパラディアン様式のリバイバルの建造物群である。第二次世界大戦時には爆撃を受けたものの大きな被害はなく、遺跡も現在まで守られている。ノリッチは、ノーフォーク州にある中世の街並みが保存された街である。ロンドンやバースと比較して観光の色は薄い、観光客を受け入れる枠組みは整っており、観光客も少なくなかった。キングス・リンはハンザ同盟の重要都市として栄えた都市である。ノリッチよりも街の規模は小さいが、同様に中世の建造物が多く残る都市である。

2. 古い建造物の保存・活用方法

1) 古いものと新しいもの 一保存と修復の在り方について

まず、保存や修復に向けた試みについて考えさせられた 2 事例を挙げる。一つ目の例は、キングス・リン大聖堂の柱の修復方法である。キングス・リン大聖堂は、1101 年に建立されたイギリス国教会の歴史ある聖堂であり、ノーフォーク州の中でも重要な位置を占めている。建造物内には、教会が 1953 年から 1960 年代に修復された旨の掲示があった。その工事で行われたと思われるが、もとの 7 本でひとつの柱とする六角形の柱が根元から切り取られ、異なるかたちの柱に変えられていた。外観は一部、ジョージア朝期に大雨で壊れた部分を直しているものの、全体は 11 世紀の建築様式を伝えるものである。内部も建築様式を残しているものの、無造作にもとの柱の土台の上に新たな柱をおく処理は衝撃的であった。日本では現在、現状保存する修復が行われており、イギリスでもこの状況は大きく変わらないが、この事例は柱の老朽化や予算の問題もあり、現在のかたちになったのだろう。修復と破壊が紙一重だと痛感させられた。

もう一つの例はノリッチ城である。ノリッチ城は「Norwich 12」という 11 世紀から現代までのノリッチを象徴する 12 棟の建造物を統合して、国際的にイギリスの都市と文化を示す建造物群として機能させる枠組みのなかのひとつである。11 世紀中世の領主の城だった建造物が 14 世紀には牢獄になり、19 世紀以降は改築されて博物館として活用された。現在は、ビクトリア朝期の博物館建築に改築された建造物が残り、内部も自然史、英国史や芸術など幅広い分野を扱う博物館として活用されている。ここで問題となるのが、ノリッチ城の 11 世紀の頃の建造物に戻すための改築を行う計画である。観光客をさらに呼びこむ起爆剤になるということや、構造が複雑であることを理由に、改築が予定されている。しかし、古い構造に戻したとしても 21 世紀に行われた改築であるという事実は覆らず、現存する 18 世紀の博物館としての歴史や、博物館建築としての価値が損なわれることになる。反対

意見もあるということだったが、その建造物の価値をどう定義するのかは専門家の間でも意見が異なると実感した出来事だった。その建造物が本来持っていた価値を取り戻すことが保存であるという立場や、現存する建造物自体が建造物の歴史で、それを保存することが大切であるという立場が想定できるが、直接建造物を見た限り、現代の技術をもってすれば、中世の構造の在り方はいかようにも検討できるにもかかわらず、建造物自体に手を加えて、構造を変える必要があるとは思えなかった。

修復や保存に向けて、古いものと新しいものをどう組み合わせるのかは難しい問題である。日本は古来木造建築が主流であり、傷んだところだけ木材を差し替えたり、穴を埋めたりして何百年も引き継いで使っていく技術が優れていた。イギリスは修復や保存に関する事情が異なる部分も多くあるだろうが、保存の観点から見たときに、残されている構造から大きく姿を変えるように手を加える修復は、避けられる場合にあって行うのであれば、建造物の破壊と呼べるのではないだろうか。現在ある最高の技術を以って保存を行い、後世に引き継いでいくのが、我々の世代の責任のように思う。

2) 「再利用」 — 建造物の価値を伝えるということ

ロンドンで多く見られ、また特徴的であったのが、古い建造物に手を加えて再利用するという手法である。特に印象的であったのが、建造物の外壁だけを残して内部を取り壊し、再利用をするという方法である。ロンドンではよくみられる方法なのか、同様の工事を行う様子が目についた。また、美術館のテート・モダンのように、昔の工場や倉庫、市場を再開発で新しい利用の方法を探す事例もある。テート・モダンは旧バンクサイド発電所の建造物を改築したものが用いられている。もとの発電所はジャイルズ・ギルバート・スコット氏の設計によるもので、発電所の閉鎖後は保存運動があったものの、Listed Building への掲載はされず、取り壊される危機があった。しかし、所蔵品の保存場所拡大の必要に迫られたテート・ブリテンによって、美術館化の計画が進み、建造物の上部にガラス張りの屋根が張られた現在のすがたへ改築された。

何を建造物の価値とするかは大きな論点である。建造物保存の意義は、建造物の様式や歴史の価値を尊重し、後世に伝えることと定義できようが、内部を破壊した場合、建造物の価値をそのまま保てるわけではない。テート・モダンの例にしても、建造物の再利用と有効活用の好例と見るか、火力発電所としてのデザイン性の高さを失わせた悪例と見るかは人によって意見がわかれよう。この問題は建造物ごとに判断するべきではあるが、基準が明確でない以上、現行法上行われる行為によって破壊され価値が損なわれる建造物があることは避けられない。

日本の例をあげれば、旧東京中央郵便局（現 JP タワー）の保存論争が記憶に新しい。旧東京中央郵便局は、吉田鉄郎氏設計の戦前のモダニズム建築で、そのデザインだけでなく、機能や構造も高く評価されていた。現在は、丸の内の再開発に伴う再利用の在り方が検討され、外壁の一部を残して高層ビルが建設されている。この保存の在り方には計画当初から反対があり、日本建築学会を中心に外観のみならず構造を保存することに意義を見出して全面保存を求める声があがっていた。当然のことながら、外壁の部分保存では、裏側や機能、構造など建築を評価する重要な要素がなくなってしまう。一方で、旧東京中央郵便局は東京駅の目の前に立地しており、経済的価値を優先して考える意見からは、高層ビル化はやむを得なかったという考え方もある。現在の社会の状況と合わせた活用と歴史的価値の保存の両立は困難な場合も多く、歴史的建造物の保存の可否は建造物の所有者や政治的意向に左右されることもある。

以上で述べたロンドンや東京で見られる再利用の方法に対して印象的だったのが、ノリッチの再利用の方法である。ノリッチでは、少なくとも見た限り、そうした再利用の方法は見られなかった。都市化のスピードや首都と地方の第一都市という都市の規模も関係するだろうが、建造物にはあまり手を加えない方法で保存が行われていた。ノリッチには既述した「Norwich 12」という枠組みがあり、さらに「Norwich 12」で保護されたものも含め、ノリッチには他都市と比較して多くの教会が残っているが、セント・グレゴリー教会やセント・アンドリュー・ホールをはじめいくつかの教会は、現在骨董市や、コンサート、結婚式場などに活用されている。

本来持っていた役割を失っているという批判があるかもしれないが、建造物自体から様式がわかるだけでなく、ステンドグラスや建造物の構造から、中世期に教会に用いられた歴史を容易に伺うことができる。聖アンデレも自分の名のつく修道院でビールフェスタが開かれる日がくるとはよもや思わなかっただろうが、現在の社会に合わせて古い建造物を保存するだけでなく、活用する方法を見出しているという点で評価できる。古い建造物の保存には

それだけで莫大な資金が必要であり、特にノリッチのように多くの貴重な建造物群が残る地域では、保存を長期的に継続させなければならない。そのためには、建造物をそのまま取っておくだけでなく、各建造物の差別化を行い、市民が受容できるように活用することで、長期的視点で資金を十分に確保し、市民の理解を得て自発的に保存を行わせる必要がある。現在も教会である建造物は教会として残し、それ以外の教会建築は歴史と両立させながら活用する現状は、保存によって市民生活が犠牲になることなく、利用目的の差別化によって建造物ごとの価値が差別化できている。建造物の入り口には、建造物の歴史を示す説明板が設置され、現在までの変遷を容易に知ることができるので、建造物の歴史がおろそかにされてもいない。現在の社会に合わせて古い建造物を活用するという点からいえば、保存と活用を両立させる理想的な方法のように思った。日本でも近年、古民家や町家を再利用したカフェやレストランが流行しているが、内部構造の一部のみを残して使いやすいように内部を大きく変えてしまう場合も多く、保存と活用を両立しているとは言いがたい。保護指定されない限り、建造物の改築は認められるのでやむをえないが、建造物の価値が理解されたうえでの再利用が日本でも進めばよいと感じた。

3. 景観の保存と活用 ―観光とマネジメントの観点から

1) 景観の活用における保存と観光

ノリッチは既述の通り、観光都市として成功を遂げた街である。プログラム中にお話を伺ったマイケル・ラブデイ氏は、Norwich Heritage Economic and Regeneration Trust (HEART) の元執行役で、ノリッチの代表的な建造物群の枠組みである「Norwich 12」の実現の立役者である。氏によれば、1980年代のノリッチは、地方の一都市にすぎず観光客も少なかったが、「Norwich 12」を作って観光客を呼び込んだ結果、現在の観光都市化に成功したということであった。

観光客でにぎわうノリッチの状況と対照的だったのがキングス・リンである。観光という観点から街を見たときに、ノリッチと同程度の建造物群を持っていながら活用が十分にされていないという印象を受けた。なお、留意すべきなのは、ノリッチより街の規模がずっと小さく、夕方に訪れたので人が少なかった上に、ラブデイ氏のように熱意をもって街を説明するようなガイドと一緒に回ったわけではなかったということである。受けた印象が全く異なるのはある意味当然の事であるし、街の規模がちがえば保全にかけられる予算規模もまったく異なることは容易に想定され、一概に比較することはできない。

しかし、キングス・リンは小さい街であるが、街が観光を意識しているらしいことはうかがえた。具体的には、大聖堂や現在は観光案内所として用いられている昔の税関には、プロジェクターでアーティストの作品が映し出され、音楽を流す取組が行われていた。この取組へはプログラム参加者からも賛否両論で、プロジェクターを別の重要な建造物の上に置くことは景観破壊だという意見や、映像が見にくいことに対する批判があがる一方、プロジェクターは景観を破壊していないし、暗くなったら映像効果も得られたのではないかという意見もあった。また、重要な建造物には説明板も設置されていたが、説明板は小さいものや字が読みづらいものが多く、ノリッチのように規格の統一は行われていなかった。夕食を取った店は倉庫として利用された建造物で、2階は1603年の街のミニチュアが置かれたギャラリーになっており、その説明はわかりやすかったが、その存在は目立たず、気がつかない参加者もいたほどであった。

以上のような取組を考えると、いずれも観光地化に向けた取組を行っており、その成否はノリッチとキングス・リンである程度の比較を行えそうである。既述した留意点はあるものの、その観点から私見を述べる。重要なのは、歴史的に重要な建造物の存在やその保全だけでは、観光の観点からは十分ではないということである。先にノリッチとキングス・リンを単純に比較することはできないと述べたが、実際にはノリッチが以前おかれていた状況もキングス・リンとは大差なかったのである。ノリッチはキングス・リンのような状況から40年かけて現在のような観光都市としての地位を確立しており、観光都市としての枠組み作りと定着には観光資源が存在するだけでなく、時間と資金、投下される人材の意識の高さが必要であることが大前提になることがノリッチの事例からわかる。すべての都市が観光地化すべきであるという論には首肯しかねるが、景観保全や建造物の保護という優先されるべき課題に対し、観光は街にそうした保護のための資金をもたらすので、有用な資金源となりうる。したがって、観光と保全は切りはなして考えることはできない。観光地化するために必要なことは、単に保護をするだけでなく、魅

力のある「物語」を街や建造物に付与し、場合によっては再構築することであるということが、2都市の事例から伺える。ノリッチは統一したイメージを打ち出すことに成功し、観光地としてわかりやすいイメージを与えることに成功しているが、キングス・リンはそうではなかった。ノリッチは「Norwich 12」で、ノリッチの重要な建造物群を整理し、決まった色の plaque（飾り板）や同じ規格の説明板を設置して歴史的建造物を示すなど、統一性にすぐれていた。各建造物が持つ歴史を簡潔にわかりやすくまとめて価値を観光客に示すことができているのである。価値を示すために必要になるのが「物語」である。なぜ歴史的価値があるのかという点を、わかりやすく伝えるストーリーとして提示できるかどうか観光都市としての成否に関わっている。一方で、キングス・リンの街並みは中世の建造物がそろっているが、説明板などからも統一された印象がなく、何が重要であるのかが見えにくくなっている。ラブデイ氏の話の思い起こすならば、「物語」を作るうえで、観光行政や文化行政に関わる人間の意識にも、成功の可否はかかっている。

「物語」の再構築という観点からもう2点例を挙げれば、興味深い例がバースのローマン・バスで見た例と、ノリッチで参加したゴーストツアーである。ローマン・バスでは、ローマ期の服を着た女性が当時の暮らしを再現しており、視覚的にその遺跡が持っている物語をわかりやすく来訪者に伝えていた。また、ノリッチのゴーストツアーは、その建造物や区画にまつわる亡霊の話をしながらかつて街をめぐり、歴史を語るという構成である。語られる内容の真偽は定かではないが、その歴史を学びつつ、夜間という観光客がお金を落としづらい時間にアトラクションを設定することで、さらなる消費に結び付けている印象をうけた。

2) 「イギリスの市民意識は高い」のか

イギリスの景観保全の状況と日本とを比較すると、古い建造物が日本は木造であるのに対し、イギリスでは多くが石造であるために残りやすいという特徴があり、イギリスの方が多様な時代の建造物が残されている。さらに、それに加えてチャリティが発達していることも、建造物だけでなく街並み全体が保存された理由としてあげられる。市民の多くが再利用を望んでいるために古い建造物がパブやアパートとして利用されることもあるし、既述した HEART のように、建造物の再利用や保護・保全を推進するチャリティも存在する。先にとりあげたラブデイ氏は、景観の保存において市民の熱意が大変重要であると語っていた。プログラム中にもイギリスの文化遺産・建造物保護において、市民参加が進んでいる印象を受けた。さらに、保護を行うチャリティや市民団体が発達しているだけでなく、行政としても市民に対して幅広いプログラムを用意しており、Historic Environment Service が州ごとにチャリティや市民団体を管理下において活動できるような仕組み作りが行われている。

こうした事象に対して、イギリスは街や文化財を守る市民意識が高いと語られがちである。しかし、少なくともすべての地域で市民意識が高いとは言えない。著者がプログラムの前後に宿泊した地域はロンドンの郊外で、その地域ではビクトリアン様式やジョージアン様式と思われる建造物もあったが、周りの建造物がそれに調和して建てられているわけではなく、飲食店の看板も明るい色で大きく掲げられているものもあった。ロンドンの中心部では景観が統一され、再開発の方法や新しく建てる建造物の基準も厳密に決められているのに対し、ロンドンの郊外になると景観の統一性はほとんど意識されていなかった。これは、ロンドンの中心部では観光の観点が重要視されていることに起因するかもしれない。歴史的建造物が十分に保存され、街並みが美しいことが観光資源となり、街に観光客を呼び込めるからである。ロンドンの中心部は大きな教会や歴史的に重要な建造物が集中していることからその周辺の保全が優先的に行われているが、観光客を呼び込むのに不十分な郊外はそうした施策が行われていないのではないかと。以上のことから、イギリス全域で街並みを守る意識が徹底してはならず、観光地化していた地域に行く限り、法整備が徹底していることから、市民意識が高くみえるのだと考察できる。

3) 観光地化の問題点

以上で述べてきたように、景観の保全において、観光は極めて重要視される。しかしながら、観光地化の弊害も大きい。以下では、2点の問題を扱う。

第一の論点は、観光地化によって、わかりやすい「物語」の構築が必要になり、街のすべての歴史を理解してもらいにくくなるのではないかとということである。見えやすい歴史のみが歴史として語られ、その街がたどってきた変遷が理解されづらくなる問題である。印象に残っているのは、バースでガイドに案内されながら街をまわったと

きのことである。ガイドの案内は、ローマ期の遺構と18世紀以降に関する説明に集中し、バースのローマ期から18世紀までの歴史への理解が進まないまま、ツアーは終了した。ガイドの説明は、現在の都市景観から知られる歴史は理解できても、本質的に観光客に対して街の歴史を提示しようという姿勢は見られなかった。見せたい歴史を見せることに特化した結果、その時代以外の歴史が見えにくくなってしまっているように思う。「Norwich 12」の枠組みの優れている点は、デーモン人定着後、街が発達して現代に至るまでの建物を網羅するかたちで建造物群を構成しており、それが中世の建造物群に加えて街の歴史を理解するために十二分に機能していることである。

第二の論点は、観光と保存は両立するかという点である。観光客が増えると、より保護に必要なお金もかかる。ノリッチ城の学芸員は、遺跡を保護するにはお金がかかるので、観光客に来てもらいたいが、観光客が増えると遺跡が傷み、心ない破壊にあうリスクも高まるので複雑だと語っていた。観光が古いものを破壊する危険性は排除できないが、資金繰りの観点から必要にも思える。しかし、例えばキングス・リンのよく保存された街並みや、静かな街の雰囲気すばらしさは、観光地化されてしまえばすぐに失われてしまいかねず、そうなるを取り返しがつかない。かといって、現在のままでは十分に保存がされているわけではない。中世に倉庫として用いられていた建造物の窓枠は落ちそうにぶら下がっていたし、テナントも入っていないようだった。現在のままでは、せっかく残されてきた中世の建造物群が傷んでしまう可能性がある。したがって、少なくとも、ただ「ある」というだけではなく、保存を行う必要はある。理想としては、観光都市ではないにせよ、保存のための資金繰りに成功する街づくりである。観光という視点を抜きにしても、一つ一つの建造物のもつ歴史を丁寧に組み立てて周知することで、まずはその街の持つ歴史を知ってもらえれば、市民からも保存に金がかかることを理解してもらいやすくなり、大前提となる保存につながるだろう。そうした活動に興味を持つチャリティや研究機関とのつながりが生まれるかもしれない。その結果、保存や整備が進んで、一定量の観光客が訪れるようになれば、大きく建造物群が損傷を受けることもなく、よりよい保存のための資金にも困らない状況が生まれるはずである。観光客が増えて街が潤えばよいという考え方が一般的にされがちだが、そのように単純化できるものでもない。観光と保存の両立は常に考えられていくべき問題である。

4. おわりに

以上、イギリスの建造物や景観保全の在り方を各都市の例を紹介しながら見てきた。途中話が前後して混乱を招いた部分もあったかもしれないが、建造物や景観の保全の問題は、現代の人々の暮らしや観光を含めた社会としての利便性と、歴史的価値の保存の両立の問題に集約できる。著者はどちらかといえば古い建造物は全面保存すべきという立場であったが、この問題には明確な正解がなく、行政や市民が常に意識してバランスを考慮していかねばならないのだと考えを深めることができた。また、イギリスは市民意識が高いから保存されているという論はあくまで一元的な論にすぎないということも、実際の街並みを見る中で痛感したことである。あくまでも法整備が古い建造物や景観を守るためには必要であり、観光という視点だけでなく市民の理解が、保護の前提となっていることも、忘れてはならない。

拙稿では本プログラムで得た実感を十分に伝えきれていないように思うが、今後本プログラムに参加を希望される方の一助となれば幸いである。

最後になりますが、本プログラムの実施にあたりご尽力いただいたセインズベリー日本藝術研究所の皆様、東京大学文学部の先生方や職員の皆様、ならびにプログラム中お世話になったすべての皆様に心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。

1. はじめに

このプログラムを通して学んだことは数多くあるが、中でも遺跡保存のあり方や社会との関係について興味深いと思えるような内容が多くあったので、それについてレポートを書くことにした。ただ、日本の遺跡保存について知っていることがほとんどなく、帰国後調べる時間もなかったため、良い比較検討ができなかったことが悔やまれる。これについては今後の課題としたい。

2. イギリスにおける遺跡保存の現実

そもそも遺跡はどうやって発見され、調査されるのだろうか。セインズベリー日本藝術研究所で話を伺ったところ、考古学者が採掘地域を指定できることはまれである。よくある例としては、ある土地が開発の対象になった際、着工前の調査で考古学的価値が認められた場合に発掘が始まるらしい。Michael Loveday 氏によれば、理想的な遺跡保護と実際の現場ではしばしば衝突が起り、緩衝材となる人材が間に入ることが必要になる。開発者側は費用を払いたがらず、莫大な費用のかかる発掘調査は不可能だという一方で、考古学者側は理想を追い求めてしまう。彼によれば、その折り合いを図ることが遺跡保存においては重要なのだそうだ。

日本においても遺跡が見つかるのは土地が開発される際に見つかることが多いそうだ。実際私の高校があった奈良においても、地面を掘ると遺跡が出てくるから奈良にはホテルが少ないなどという冗談か本当かわからない話が出回っていた。調査には費用がかかる上、どこを掘っても出てくるというわけではないため開発業者に依存することは仕方ないにせよ、彼らの目的はあくまで開発であり遺跡保存や考古学調査であることを考えると、考古学的に重要な遺跡や出土品がなかったことにされてしまう可能性があるのではないだろうか。この話は帰国後に考えたことであるため詳しい人に話を伺うことはできないままである。

3. 羊と遺跡保存

イギリスにおいて、遺跡保存というものの形は個々の遺跡により様々である。日本では考えられないような保存の方法から、理想に近いと思われるやり方まで様々であった。いくつかの事例を紹介したうえで考察を加えたい。

なによりまず紹介したいのは、Hill Fort に代表的な保存法である。遺跡は牧草地として使用され、普段は羊が放し飼いされている。我々は団体で訪れたため事前に土地所有者に連絡が必要だったが、少人数で訪れる場合連絡すら不要であるという。これは日本、特に本州でなかなか羊を見る機会がないこともあってかなり驚かされた。のちに訪れた Sutton Hoo でも、羊は保存区画内部で放し飼いにされていた。気になるのは、「羊が遺跡に害を与えることはないのか」ということであろう。担当者に話を聞いたが、答えは「害どころか、糞は土を肥やし、一定の状態を保ってくれるのでむしろありがたい」というものだった。Sutton Hoo ではむしろ野生のウサギが巣穴を作ることが問題になっているらしい。

むしろこれは偶然ではなく、人々の思惑あってのことである。Hill Fort の例でいえば、遺跡として公的に扱われるようになったのは牧草地として使われ始めてからのことであり、牧場主と担当組織が交渉を重ねた結果として互いが損をしない形が確立されたのだ。私はここに、なんというかイギリスらしい巧みさが垣間見えるような印象を持った。

私は無論考古学について知っていることも少ないし、まして日本の遺跡保存について知って詳しいわけでもない。しかしながら日本で「遺跡保存」というものを考えるとき、どうしても「遺跡を遺跡としてだけ残す」ことに縛られすぎるように感じる。理想を言えば、ありのままの姿を残すことが考古学にとっては良いことなのかもしれない。だが、「保存されている土地」とは言い換えれば「活用されていない土地」である。理想を追い求めるのではなく、現実とのすり合わせを図っていくことが重要なのではないか。そういう点においてイギリスは日本に数歩先んじているような気がする。

4. 建物の保存

Norwich Castle はノルマン人が建築した城であり、18世紀から博物館として改築・使用されている。現在地上部分は二階建てで大きな吹き抜けがある構造になっているが、ノルマン時代は2階部分のみが使用されており、

現在の1階部分は多くの柱が並び倉庫として使用されるものだったそうだ。観光客への配慮とさらなるサービスの向上という理由から、これを現在の形からノルマン時代の形まで戻そうという計画が進行中で、天井を支えている18世紀に建築された巨大なアーチも取り払われてしまうらしい。この城を11世紀の建築物とみるならば、この改築は正しい。だが18世紀の建築物としてみるならば単なる破壊である。11世紀と18世紀が共に息づくこの城をどうするかという問題は私のような門外漢が結論を出していいものではないが、重要なのは11世紀を再現したところで、それは「再現」に過ぎないということではないかと思う。どれほど研究を重ねて、当時に似せた作りにしようと、出来上がるものは「11世紀風の21世紀建築」であり、後世にはそのように扱われる。その意味でこの問題は「何を残す/建てるか」ではなく「何のために残す/建てるか」の問題であり、学者や関係者だけでなく、広く一般に意見を募るべきなのではないかと考える。

建築物の保存についても一つ面白い話を紹介したい。King's LynnのGateway Churchである。ここは戦後になって立て直されたのだが、柱を建立する際にオリジナルの柱の土台は引き続き使用しているものの、柱の位置が明らかに中心からずれているため、一瞥すればどこからが新しい部分なのかがわかる状態になっている。なぜそんな工事をしたのか関係者に話を聞くことはできなかったが、敢えてそうしたのか、重要でないとして無視されたのか、いずれにせよこの柱は「何のために残す/建てるか」という問いを我々に投げかけているのではないかと思う。

建築物を単純に日本と比較するのは難しい。日本は伝統的に木造家屋がほとんどで地震も多く、当時のままの姿を残している建築物は珍しいが、イギリスは石造建築が主流であり地震も少ない。保存ということを考えても、やるべきことは全く異なるだろう。しかしながら日本も明治以降、石や煉瓦で作られた建物が増えてきた。これらの建築物に対してはイギリスに学ぶことが多いと思う。一方で日本も地震や津波といった災害対策の歴史は長い。遺跡保存に限った話ではないかもしれないが、日英の技術や知恵がさらに共有され発展していくことを望むばかりである。

5. 一般人と考古学

一般人が遺跡、考古学と直接かかわりをもつ例として、metal detectingが存在する。これは、金属探知機を用いて素人が遺物を探索し、発見したものを博物館に送ることで鑑定してもらえという仕組みである。ガイドラインの作成も進んでおり、一定のルールさえ守れば誰でも考古学調査ができるというシステムはとても画期的なシステムである。また、アマチュア調査チームで、専門家のアドバイスを受けながら発掘を行っている人にお話を伺うことができた。彼らは他の考古学機関から資金援助を受けており、それを専門家の招致などに充てているとのことだった。私はアマチュア集団の考古学調査というものを聞いたことがなかったが、ヨーロッパからの学生の中に似たような活動に参加したことがあるという人もおり、日本との関わり方の違いを感じた。

もちろん一般人が携わることは必ずしもいいことばかりではない。Metal detectingでも出土品を博物館に申請することなくインターネットオークションなどで売り払う人間が存在する他、nighthawksと呼ばれる盗掘者たちが夜間に勝手に発掘を行い、遺跡にダメージを与えたとえ出土品を持ち去ってしまうこともあるという。またそういう類の人間は大体乱暴であることが多く、一般人では対応が困難であるようだ。

Metal detectingを含めたアマチュアの発掘を禁止すればよいのではないかと質問したところ、一般からの要望がある以上禁止するつもりはないとのこと、これもイギリスらしい対応だなと感じた。個人の意思が優先されるというのはいかにも人権思想を生み出した民族らしい考え方ではないだろうか。

一般の人々が考古学へ向ける熱意は、プログラム全体を通してとても印象的だった。むしろこのプログラム中に話を伺った方々の多くが何らかの形で遺跡や考古学に関わりある人々ではあったので、彼らの関心が高いことは当たり前かもしれないが、観光地となっている遺跡や博物館に訪れている人々の数は日本より多いように感じたし、遺跡や博物館側も、募金箱の設置や子供への教育などに力を注いでいた。盗掘は深刻な問題だが、そもそも出土品に高い価値がなければ起こらない問題でもある。つまり、それだけ多くの人間が昔のもの、昔のことに関心を寄せているということの裏返しでもあるのだ。前述のアマチュア発掘チームの一人に、「なぜ発掘をするのか、その熱意はどこから来るのか」と問いをぶつけたところ、「自分の先祖や過去のことに興味を持つのは当然のことではないか」とあっさりした返答を頂いた。彼は考古学への関心という点で一般人とは外れているか

もしれないが、それでもこの言葉にはイギリス人の考古学への態度の一端が表れているように思える。

6. 遺跡と観光

Stonehenge は日本でも名前の知られた遺跡であり、多くの観光客が訪れている。ビジターセンターでは Stonehenge が作られた時代の人々やその変遷について学べるほか、再現された当時の家々なども存在し、訪問者がその時代に思いをはせることができるようになっている。しかしながら、多くの観光客は一方で考古学調査の妨げになっている。Nixon 先生曰く、「ストーンヘンジの調査を行うために、考古学者たちは深夜に調査を開始して、朝には元通りにしなければならぬ」とのことで、関係者の苦勞が偲ばれた。

一方、Caistor Roman Town はローマの都市の遺跡であるが、地上にはわずかにローマ時代の壁の跡が残るのみである。観光客はほとんど訪れず、夏場は牧草地として使用されている。かつてどのような建物があったのか、どのようなものが使われていたのかを示すために AR 技術を導入するなど画期的な方策がとられているが、どうやって人々に興味を持ってもらうかは引き続き大きな課題であるという。同じようなことは Happisburgh でも起こっており、こちらは北ヨーロッパ最古の人類の足跡が発見された海岸であるにも関わらず、訪れた訪問客の多くは犬の散歩やドローンを飛ばすといったことに興じており、考古学的興味を持った観光客はおそらく我々だけだったように思う。

遺跡保存と観光をどう調和させるかというのは難しい問題である。観光客は遺跡保存のプロではないのだから、そのつもりがなくても遺跡を傷つけてしまうこともあるだろう。ただ遺跡保存に関わる人々の多くは「観光客に来て欲しい。この遺跡のことをもっと知って欲しい」と思っているようだ。しかしながら、観光ということばかりを前面に押し出すのも良くないのではないだろうか。ストーンヘンジのように考古学的調査が進まないということの他にも、観光資源を強調しすぎると観光に訪れた人が誤った考えを持ちかねないという危険性がある。プログラム中 Bath へ行った際、ローマ時代とジョージ王時代の建築物が保存された街と遺跡群に大変感銘を受けたが、一方でそのほかの時代のものが観光客向けに展示されていることはほとんどなかったように感じた。観光の目玉はその2つであるにせよ、もう少し多様性があった方が歴史観という点では良い方に作用すると思う。二者の両立は日本でもおそらく大きな問題となっているはずであるので、機会があれば関係者に話を伺ってみたい。

以上、興味深いと思ったことに関連して自分の考えたこと、感じたことを紹介した。しかし、プログラムを通じて何よりも強く感じたのは、「遺跡によって最適な保存方法は違い、最善を模索するには人々の熱意が必要だ」ということである。社会は絶えず変化を続け、街並みや土地活用も変化を続ける。あるものを残すということは、その変化に棹さす行為に他ならない。何を、何のために、どう残すかということが、その遺跡や建物の関係者や地域の住民たちの間で議論されることで、最適な保存の形が生まれてくる。そういう意味で、遺跡と社会、考古学と社会というものは切り離すことはできないのではないだろうか。

7. おわりに

今回のプログラムはロンドンとノリッチという二つの都市を主軸として、遺跡や博物館を回りながらイングランドの考古学や遺跡の在り方、また社会との関わりについて学ぶというものだった。考古学や博物館学というものを学んだことない私には専門的な分析や考察というものはできなかったが、それでも一人の参加者として、一人の異国人としてそれらに向かい合ったつもりである。また個人的な話であるが、このプログラムは私にとって初めての海外研修でもあり、現地で案内を務めてくださった方々はもちろん、他の参加者との交流を通して、学術的問題から日常生活に至るまで様々な見識や見解に触れることができたことは何物にも代えがたい経験だった。セインズベリー日本藝術研究所の皆さんをはじめ、先生方や事務の方々、また2週間寝食を共にした仲間たちにはどれほど感謝しても足りないほどである。本当にありがとうございました。

1. はじめに

私がこの報告で扱う問いは、「どこから資金を得るか」と「誰が組織を維持するか」という二つである。この冬期プログラム中は、ロンドンとノリッチという二つの都市の様々な博物館・研究機関・考古遺跡を見学し、それぞれの場所に携わる人々から話を聞いた。実際に訪れるまでは、漠然と「日本の博物館や文化政策よりも資金や人材の面で恵まれていて、市民からの認知度も高いのだろうな」と想像していた。しかし、それぞれの機関や組織に固有の問題があり、必ずしも順風満帆な環境とはいえないことが徐々にわかってきた。そこで、機関や施設を運営する際に不可欠な課題「どこから資金を得るか」と「誰が組織を維持するか」という二つを私の報告で設定することにした。この二つは互いに深く関わり合っているが、できるだけ切り分けて分析したい。また、できるだけ私が現地で見にしたものや、話を聞いた人々の具体的な事例にそって報告する。

2. どこから資金を得るか

1) 博物館で目にしたものから

A) ドネーションボックス

ロンドンの大英博物館 British Museum は入館料を完全無料化しているが、その代わりに館内のいたるところにドネーションボックスを設置している。British Museum のほか、Museum of London、Tate Britain、Thetford Ancient House Museum などでもドネーションボックスがみられた。表示も明瞭でよく目立ち、推奨している最低額も 4～5 ポンド（日本円で 560～700 円）と具体的であった。特に Museum of London のドネーションボックスのアピールははっきりしている。同博物館は 5 年後に移転を控えており、資金面での課題を抱えている。そのような喫緊の課題をぬきにしても、フリーミュージアムのまま保ちたいという目的が明確に見てとれる。

B) メンバーシップのリーフレット

どの博物館にもメンバーシップのリーフレットが置かれていた。この方法は日本の博物館ともあまり変わらないように思われたが、どれほど認知されているのか、各博物館の予算にどのくらい貢献しているかまでは今回明らかにならなかった。しかし、メンバー向けのプログラムの頻度の高さや種類の豊富さから、来館者や地域住民を取りこむことに一定の成果を上げている印象を受けた。

2) 機関・組織に関わる人の話から

A) Norwich Castle Museum、Tim Pestell 氏

ノリッチ城博物館では、ヴィクトリア朝時代の姿を残す現在の建築から大きく様を変え、11 世紀ノルマン朝時代当時の建築を再現する一大プロジェクトが進行中である。その目的は大きく二つある。ひとつは、現在の博物館の建物の構造が複雑であることを考慮し、来館者により配慮したいため。もうひとつは、博物館へより多くの来館者を集めるための話題・アピールポイントにしたいためである。同博物館はイギリス国内でも代表的な博物館であるとはいえ、政府からの援助額はあまり多くない中で、博物館の改装・改築のための巨額の資金をどこから集めるかが課題であった。

▶ 改装プロジェクトの予算はどこから

Pestell 氏は博物館の集客力に確信を持っており、「博物館自体がお城だから、お城とコレクションのどちらも持っていることが私たちの強みだ」と話していた。

18 世紀当時の面影を残したまま、吹き抜けの開放的な空間をもつ現在の博物館も魅力的に感じられたのだが、11 世紀の建築を再現するために新たな壁や床をつくることに対しては意外にも反対意見は少ないとのことだった（Pestell 氏談）。イギリスには、何世紀にもわたって残り、時代ごとの社会環境やそこに住んだ人々によって姿や用途を変化させてきた建築物や街が多く存在する。そのため、遺跡が経験してきた時代のうち、どの時代の姿を再現し保存すればその価値をもっともよく伝えうるのか、という検討が不可欠になってくる。ノリッチ城博物館の決断は、約 1600 万ポンド（日本円で約 22.5 億円）もの費用を動かしてでも伝えたい価値は「11 世紀当時の城の姿」なのだと、検討に検討を重ねた結果だろう。

▶ National Lottery Fund の存在の大きさ

そしてその決断を支えるものは、外部の大きな資金源の存在である。改装プロジェクトの予算の内訳を見ると、Heritage Lottery Fund（以下、HLF）からの資金がほぼ予算の半分を占めていることに驚く。HLFは現在イギリス全土の文化遺産保護に最も大きな額の援助をしている非政府組織で、1994年の設立以来、45万件のプロジェクトに対して340億ポンドを支援してきた実績がある。HLFについては、Mike Pinner氏の項でも後述する。

参照：Heritage Lottery Fund のウェブサイト <https://www.hlf.org.uk/> 最終閲覧 2017/03/02

B) Norwich HEART (Heritage Economic and Regeneration Trust)、Michael Loveday 氏

Norwich HEART はノリッチを拠点とする非営利団体で、ノリッチの文化遺産の保護、開発業者への助言、情報発信、教育活動などを幅広く手がけている。Michael Loveday 氏は同団体の初代代表を務めた。

▶ urban archaeology の資金は開発業者負担

ノリッチの街は、これまでの考古学調査から中世の貴重な建築物や遺構の存在が明らかになっており、urban archaeology とよばれる考古学分野でよく知られた地域のひとつとなっている。しかし、発掘調査に関しては、考古学者や研究機関自らが計画したり実施したりすることはほとんどない。開発業者が街中に新たな建築物を建てたり、整備を行ったりする際、事前に現場の考古学調査を行うことが義務付けられており、そのときに初めて考古学者は動くのである。その際の資金は開発業者が負担することになっている。Norwich HEART は考古学調査・遺跡保護の観点から開発業者に助言を行っている。



Loveday氏らによるノリッチの名所案内

▶ 欧州連合からの経済援助

Norwich HEART の財政面はどのように支えられているのかについて Loveday 氏に尋ねると、個々のプロジェクトによって異なるため、そのしくみは非常に複雑だとのことだった。地域レベルのスポンサーから他国の都市まで、プロジェクトの性格や規模によって様々な団体を依頼していることがわかったが、その中で印象的だったのが、欧州連合（以下 EU）からの援助の重要性である。イギリス政府が EU からの離脱を表明したことを、Loveday 氏は強く批判するとともに懸念を語っていた。「Brexit」として話題になっている政治問題が、文化保護や考古学の現場にまで影響を及ぼしていることには驚きを覚えた。この報告を執筆するにあたって追加の調査を行ったところ、EU の政策執行機関・欧州委員会（European Commission, 以下 EC）が、EU 加盟国内の文化関連の団体を対象に経済的・技術的助成や助言、プラットフォーム・ネットワーク構築の援助を行っていることがわかった。

参照：Norwich HEART のウェブサイト <http://www.heritagecity.org/> 最終閲覧 2017/03/02

European Commission - European Union Funding のウェブサイト

http://ec.europa.eu/culture/policy/cultural-creative-industries/eu-funding_en 最終閲覧 2017/03/02

C) Norfolk Historic Environment Service (HES)、Andrew Hutcheson 氏

Norfolk Historic Environment Service (HES) は、ノーフォーク州の歴史・文化遺産やそれが残る地域に対して開発や保護の計画に対する助言を行い、また考古学調査の記録・アーカイブ、データベース構築などを行っている団体である。

▶ 認知度・支持の向上が大切

HES の上級職員（計画部）の Andrew Hutcheson 氏によると、HES の資金源はノーフォーク州政府 (Norfolk County Council)、州内の7つのディストリクト政府、大英博物館、ヒストリック・イングランド（イギリス政府の非政府部門公共機構）、欧州連合の寄付、開発業者などである。様々なレベルの部門から援助を受けるあてがあるとはいえ、「予算の削減にあっているため、市民からの支持が必要。市民からの支持が得られれば政府からも支持が得られる」と同氏は語っていた。

参照：Norfolk County Council Historic Environment Service のウェブサイト
<http://www.archaeologists.net/ro/412-norfolk-county-council-historic-environment-service>
 最終閲覧 2017/03/03

D) Caistor Roman Project, Heritage Lottery Fund, Mike Pinner 氏

Caistor Roman Project は、地域住民のボランティアと University of Nottingham、Norfolk Archaeological Trust などの考古学研究者・保護団体が協働して推進する Caistor Roman Town（ローマ帝国時代の街の遺跡）の発掘プロジェクトである。Heritage Lottery Fund から助成を得て行われている。

▶ 主な資金源は HLF とメンバーシップ。その使い道は

Caistor Roman Project のプロジェクトマネージャーの Mike Pinner 氏は、プロジェクト開始年となった 2012 年、2 年分の助成金として HLF に 10000 ポンドを申請した。その次の 3 年分として HLF に申請したのは実に 84000 ポンドであった。大幅な増額の理由は、事業の幅を広げるためである。

プロジェクトの資金源は主に HLF からの援助、トラストやチャリティーからの援助、そしてプロジェクト構成員からのメンバーシップ（一人当たり一年 20 ポンド）である。提供された資金は、発掘活動自体はもちろんのこと、アーカイブ、オンラインのニュースレター、ワークショップやプレゼンテーションに用いられているとのことだった。やはりここでも広く一般に活動を知ってもらうための努力がなされていた。

参照：Caistor Roman Project のウェブサイト <http://www.caistorromanproject.org/> 最終閲覧 2017/03/02

3. どのように組織を運営・維持するか

1) Norfolk Archaeological Trust, Caroline Davison 氏

Norfolk Archaeological Trust は 1923 年に設立され、ノーフォーク州内の 10 の考古学遺跡・文化遺産サイトを保護、管理および情報発信しているトラストである。

A) 正規職員は一人だけ

Caistor Roman Town で私たちが案内してくださった Caroline Davison 氏は、「Norfolk Archaeological Trust で給料をもらって働いているスタッフは私だけで、Trust が所有している 10 か所の遺跡をすべて見て回っている」と話していた。協働している他のスタッフはすべてボランティアである（University of East Anglia でお会いした日本人研究者によると、イギリスで文化保護を行うチャリティー団体には珍しくない形態とのことだった）。



Caistor Roman Town を案内する Davison 氏(左)

Caistor Roman Town の遺跡は広範囲にわたって広がっており、Caistor Roman Town の調査も現在進行中とはいえ、人手不足もあってまだまだ進んでいない。Davison 氏は、現時点では急速に発掘活動を進めることよりも、遺跡を確実に次の世代に受け継ぐことのほうが大切であると話していた。

参照：Norfolk Archaeological Trust のウェブサイト <http://www.norfarchtrust.org.uk/> 最終閲覧 2017/03/03

2) Caistor Roman Project, Heritage Lottery Fund, Mike Pinner 氏

先に紹介した Caistor Roman Project の Pinner 氏は、「私は専門家ではなくボランティアだが、このプロジェクトに関わっている。楽しいからやっている。他のボランティアが参加している理由も、楽しいから」と語っていた。また、アマチュアとしてプロジェクトに関わっていた構成員が、大学で考古学を学んでプロの道に入ることも少なくなく、同氏はそれを「学校の先生になったような気持ち」でうれしく思っていると話していた。

3) Norwich HEART, Michael Loveday 氏

Loveday 氏は、Norwich HEART が Norwich 12（ノリッチの歴史的建造物のうち 12 件を選出したもの）を制定

する際、それぞれの文化遺産の管理主を一人一人訪ねて、制定の許可をもらったという。町の遺産を守る活動は個人のモチベーションや情熱によるところが多いと、同氏は話していた。

4. イギリスの博物館・研究機関・文化遺産・文化保護団体の運営を理解するためのキーワード

まとめとして、私が今回集めた事例からイギリスの博物館・研究機関・文化遺産・文化保護団体の実態を知るために重要だと思われることからキーワードとして以下に挙げる。

1) 市民・民間からの寄付

ドネーションボックスやメンバーシップを通じた来館者や地域住民からの寄付は、博物館・文化保護団体の人的・経済的な基盤となりうる。また、政府以外に経済的援助を行ってくれる民間団体が重要な役割を担っている。

2) 認知を広める活動

市民、ひいては政府から人的・経済的支持を得るためには、その機関や団体がどのような活動を行っており、どのような魅力があるのか、どのような価値があるのかを積極的に伝えていく必要がある。ニュースレターの発行やイベントの開催などがこれにあたる。

3) 動機づけと引き継ぎ

少人数（ときには一人）の職員で運営されている団体は、その人が「疲れた、やめたい」と思えばすぐに途絶えてしまう可能性をはらんでいる。また、ボランティアによって支えられている活動もイギリスでは多い。そのため、どのように人を動機づけて活動に向かわせるかという課題がある。また、組織のしくみや理念をいかにして引き継ぐかという人材育成や組織維持が喫緊の課題になっている例も他に多くあるはずだ。

5. おわりに

博物館や遺跡保存の仕事に関わっている当事者に、実際に会って話を聞ける機会はそう多くない。その点で、今回のプログラムは貴重な体験だった。博物館や遺跡を自分でただ訪れているだけでは気づかない、活動のねらいや工夫、苦勞を知ることができたからだ。博物館の展示品も屋外の遺跡も、ただそのまま放っておくだけではその価値を理解できない。残されたものを解釈し、価値を伝える営みには必ず人が介在するし、お金も要る。どうすればうまく、どうすればより効果的にできるかを、限られた条件下で考え出さなければならない。

私が今回最も印象的だったのは Norfolk Archaeological Trust の Caroline Davison 氏だった。彼女の行動力と情熱とで Trust の活動を引っ張っていることに敬意を抱かずにはいられない一方で、この先 Trust はこのまま、あるいは今よりももっと盛んに活動を続けていくことができるのか、不安も感じたからだ。制度やお金ももちろん大切だが、それらは「人」ありきで、後からついてくるものなのだと痛感した。

最後に、今回このプログラムでお世話になった、Sam Nixon 先生、國木田大先生、Ilona Bausch 先生、セインズベリー日本藝術研究所・イーストアングリア大学・東京大学文学部のスタッフの皆様、プログラムに参加した9人の学生の皆さんに、心から感謝の意を表します。ありがとうございました。



アフリカ以外で最古(約80万年前)とされる人類の足跡が見つかったHappisburgh(ヘイズバラ)の海岸。浸食が激しく、海岸は数年前の発掘作業跡からさらに数メートル退行している。



山上あかね撮影

今年のウインター・プログラム

東京大学大学院人文社会系研究科・副研究科長

佐藤 宏之

今年ウインター・プログラムは、二回目を迎えた。人文社会系研究科・文学部は、海外の学生と直接交流しながら国際交流の実体験を積む学部生向けの教育プログラムを、平成26年度から開始している。第1回のサマー・プログラム（平成26年）は、英国セインズベリー日本藝術研究所のご協力のもと、英国等のヨーロッパから4名の学部学生を招き、文学部だけではなく全学の学部から公募した4名の学部生を交えて、2週間にわたり東京と北海道で文字どおり寝食をともにしながら、考古学や文化資源・遺産、美術史等に関する施設見学と学習を実施した。英語漬けの毎日を送る2週間は短すぎず長すぎない期間であり、このサマー・プログラムがその後のプログラムの見本となっている。

平成26年度末には文学部とセインズベリー日本藝術研究所との間で正式に部局間協定を締結し、平成27年度からイギリスでのウインター・プログラムも開始された。セインズベリーが担当するウインター・プログラムの構成は、東大が実施を担当するサマー・プログラムと構成の基本はほぼ同じであり、英国を中心とした学部生5名と東大生5名が、2週間（前半：ロンドン、後半：イギリス南東部）行動をともにしながら、期間中全て英語を使用して、見学・実習・講義・ディスカッション等を行う。

今回は初回ということもあり、担当するセインズベリー側がきわめて充実したプログラムを用意していただいたために、ほぼ唯一の課題として残された「適度なプログラム構成」と「適度な自由時間の確保」も、今回は一応果たされたようである。が、相変わらず今回のウインター・プログラムでも、毎日相当な距離のウォーキングが必要とされたようだ。しかしながら、ロンドンをはじめとして、伝統的な都市の施設や遺産を十分楽しむためには、歩くことが一番であることはまちがいない。プログラムの詳しい内容と受講生の考え・感想や戦わされた議論等については本書の各部に譲るが、事前のWEB講義をはじめとして、今回も充実したプログラムになった。受講した東大生にとっては、普段は決して味わえないであろう体験を多数経験することができたはずである。

末筆ではあるが、文学部の関係教職員の皆様、特にプログラムに随行していただいた教職員の方々には、厚く御礼申し上げたい。また今回のプログラムも成功に導いたセインズベリー日本藝術研究所のスタッフ一同と、現地で丁寧に対応・協力していただいた博物館・美術館の学芸員の方々にも深謝したい。

東 京 大 学 大 学 院

人 文 社 会 系 研 究 科 ・ 文 学 部

東京大学大学院人文社会系研究科附属
北海文化研究常呂実習施設

〒093-0216 北海道北見市常呂町字栄浦376



東京大学 本郷キャンパス

〒113-0033 文京区本郷7-3-1



セインズベリー日本藝術研究所

ノーフォーク州 ノリッチ



平成28年度
文学部冬期特別プログラム
(報告書)


編集発行 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

発行日 2017年6月28日

印刷 三鈴印刷株式会社



東大文

 SAINSBURY INSTITUTE
For the Study of Japanese Arts and Cultures
セインズベリー日本藝術研究所

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/>